明治三十六年三月二十日發行（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

第百六拾號

私立大日本婦人衛生會

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
每月一回二十五日發行
內務省許可明治三十一年二月二十八日

婦人衞生雜誌

第百六拾號 目次

●四月例會報告

來四月四日（第一土曜日）午後正一時半より晴雨に拘はらず例會を麹町區富士見町富士見小學校樓上に於て相開き左の講演あり當日は體操衛生學取調べの爲め暫く米國に留學せられ近き頃歸朝せられたる井口氏も出席被致候間萬障御繰合せ御知友御誘引御來會被下度候也

追而總會は五月初旬開會のこと●衣服御質素の事

演題未定　醫學士　石原　久君

米國女子體育の現況　女子高等師範學校教授　井口あくり子

明治三十六年三月　私立大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衞生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんと皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んといと易からずこれ衞生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も／＼衞生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつはら擧るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面日を改めんとするは誠に喜ばしきことなりされども夫の衞生の事に至りては更に注意を缺かざるものゝ如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人相ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衞生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々を招請して衞生上諸般の講義演說談話を聽き互に相研究し尙之を筆記して冊子を編輯し會員に分ち頒か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸姉妹に告げ其贊成を仰がんことしかり

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衞生會規則

（明治廿二年十二月改正）

●第一章 目的

第一條 本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衞生上の智識を開發せしめ因て社會全般の幸福を増進するにあり

●第二章 名稱位置

第二條 本會は私立大日本婦人衞生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く

●第三章 會員

第三條 本會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得

第四條 入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を別記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員證を交付す（交付手續卷末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし

第五條 會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ヶ月金三拾錢以上通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす

第六條 男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし

第七條 會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得

第八條 退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻さず

●第四章 役員

第九條 本會に推戴員を置き其中より總裁一名を恭し皇族の妃殿下に願出るものとす

第十條 本會に左の役員を置く

會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員二十五名、書記若干名

第十一條 會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命ず但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託することあるべし

第十二條 會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記録雜務を掌る

第十三條 會長の見込を以て役員外特に會員中より臨時指名委員を置くことあるべし

第十四條 會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺位を生するときは次點者を以て補缺す

第十五條 會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す

●第五章 集會

第十六條 集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし通常第一土曜日午後一時より開會するものとす總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし評議員會は時々開會須要の事項を評議するものとす

第十七條 毎會學識經驗ある人々に衞生上の講義演說談話を囑托し會員をして臨席聽講せしむるものとす

第十八條 會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々員に誘致し講義演說等を陪聽せしむることを得、但衣服は總て質素たるへきこと

第十九條 講義演說等は男子の傍聽を禁す但贊成員若くは會員に緣故ある男子は此限にあらす

第二十條 規則の改正を要し又は重要の事件あるときは總會に於て議定するものとし議定は總て多數決とし可否同數なるときは議長之を決するものとす

第廿一條 毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の増減等を報告すべし

●第六章 會計

第廿二條 本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす但些少の金額に限り日用支出の爲め事務所に引出置くことを得

第廿三條 會計の收支は總て會計擔任の幹事の檢印を要するものとす

第廿四條 會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

●第七章 支會

第廿五條 地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得支會は私立大日本婦人衞生會某支會と稱し其規則は本會の規則と抵觸せさる樣起案すべし

第廿六條 本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす

第廿七條 支會には支會限りの會員を置くことを得

第廿八條 支會に加入したる本會々員に配付すべき本會の雜誌は支會に回送すへきを以て其費資を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ

第廿九條 支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●第八章 雜件

第三十條 本會は毎月一回雜誌を發刊し毎會に於ける衞生上の講義演說談話等の筆記及內外彙報本會の諸報告等を揭け之を會員に配付すべし支會の報告あるときは又同じ

第卅一條 會員又は會員外の者にして金圓若くは書籍物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を簿冊に登錄し尙

本會雜誌を以て報告すべし第卅二條 會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし(郵券送一割增)第卅三條 會費は東京府下に限り毎月領收人差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局(牛込局宛)振出しあるべし第卅四條 會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若くは廣告することあるべし第卅五條 本規則は會長の意見又は會員二十名以上の賛成に依り總會の決議を經るに非されば之を更正することを得ず

事務所 東京市牛込區矢來町三番地

私立大日本婦人衛生會

●役員姓名

總裁 東伏見宮依仁親王妃 周子殿下

會長 侯爵夫人 鍋島榮子

副會長 濱尾作子

(いろは順)

幹事 鳩山春子
仝 羽田三緒子
仝 磯啟歌子
仝 岡田徳子
仝 高木かう子
仝 松平芳子
仝 三浦教子

評議員 石川さだ子
仝 濱田捨子
仝 仁禮壽賀子
仝 西 乃子
仝 男爵夫人 西 靜子
仝 德富靜子
仝 緒方悅子
仝 男爵夫人 川口直子
仝 男爵夫人 加藤鈴子
仝 吉武輝枝子
仝 子爵夫人 田中伊代子
仝 高橋孝子
仝 丹波貞子
仝 男爵夫人 南部限子
仝 中濱芳子
仝 岡山とし子
仝 山本多穗子
仝 子爵夫人 松前藤子
仝 子爵夫人 松井正子
仝 馬渡玉子
仝 伯爵夫人 松平光子
仝 子爵夫人 秋元宗子
仝 三宅藤子
仝 宮本樂子
仝 宮下咲子

●文會 千葉、新潟、山形、宇津宮、茨城、高崎

本會特別賛成員

(●は本會に於て講演せられし諸氏)

醫學博士 ●入澤達吉君
理學博士 ●飯島魁君
ドクトル ●伊澤信平君
地方視學官 ●色川圀士君
醫學士 ●伊東祐彦君
ドクトル ●飯盛挺造君
醫學博士 ●伊藤隼三君
理學博士 ●石川千代松君
赤十字社內科部長 ●岩井禎造君
新潟 池原康造君
同 池田澂君
貴族院議員 濱尾新君
醫學博士 ●濱田玄達君
法學博士 ●鳩山和夫君
東京 萩原綱四郎君
醫學博士 ●芳賀榮二郎君
衛生局長 ●長谷川泰君
新潟 長谷川一詮君
小兒科 小原綱之君
醫學士 ●林春雄君

醫學士 ●佐藤達次郎君
醫學博士 ●緒方正規君
步兵少佐 ●堀內文次郎君
醫學博士 ●土肥慶三君
醫學博士 ●岡田和一郎君
醫學博士 ●大澤謙二君
醫學士 大西秀治君
醫學博士 ●大澤岳太郎君
一等藥劑官 ●恩田重信君
醫學士 若杉喜三郎君
男爵 ●加藤弘之君
ドクトル ●加藤照麿君
醫學士 ●賀古鶴所君
醫學博士 ●河本重次郎君
醫學博士 ●片山國嘉君
醫學士 川上雅重君
ドクトル ●金杉英五郎君
醫學士 ●笠原光興君
醫學博士 ●高橋順太郎君
ドクトル ●高山紀齋君
醫學博士 ●高木兼寬君
法學博士 高木豐三君
醫學士 ●田代義德君
新潟 田代亮助君
男爵 高崎正風君
醫學士 竹中成憲君
醫學士 ●高田耕安君
新潟醫學校長 ●高橋辰五郎君
藥學博士 ●丹波敬三君
醫學士 高橋貞碩君
藥學博士 ●田原良純君
醫學博士 ●坪井次郎君
醫學士 ●久保猪之吉君
醫學士 米山彥郎君
三等軍醫正 星野葆光君

醫學士 ●宮本叔君
一等軍醫 橫井忠國君
大日本教育會長 辻新次君
理學博士 ●坪井正五郎君
醫學博士 ●長與稱吉君
男爵 南部徵男君
藥學博士 ●長井長義君
新潟 長井千尊君
醫學博士 ●中濱東一郎君
新潟 中村勇三郎君
醫學士 村松猷三君
醫學博士 ●隈川宗雄君
醫學博士 ●栗本東明君
醫學士 ●山田鐵三君
大審院判事 馬屋原彰君
警視廳第三部長醫學士 ●山根正次君
岡山 山川春二君
醫學士 ●丸茂文良君
衛生試驗所技手 ●丸山長四郎君
松山病院 松山棟庵君
ドクトル ●小柴信六郎君
盲啞學校長 ●小西信八君
廣島 小泉貫君
醫學士 ●古川榮君
東京 布施正顯君
臺灣民政局長 ●後藤新平君
帝國大學教授 ●エ、ベルツ君
醫學士 ●中野梁君
文部書記官 ●寺田勇吉君
子爵 秋元興朝君
前軍醫總監 ●足立寬君
ドクトル ●新井古芳君
新潟 岡部玄四郎君
高崎醫會長 土谷全次君
產科婦人科 ●水原漸君

ドクトル ●久保田誠麿君
醫學博士 ●佐々木政吉君
醫學士 淺田決君
ドクトル ●朝倉文三君
ドクトル ●朝山義六君
高崎 秋田聰太郎君
醫學博士 佐藤三吉君
醫學士 ●櫻井郁二郎君
醫學士 ●佐藤恒久君
ドクトル 佐伯理一郎君
ドクトル ●榊順次郎君
醫學士 ●神保三郎君
醫學士 ●櫻井恒次郎君
醫學士 ●北村精造君
ドクトル ●北川乙二郎君
醫學士 ●木下正中君
醫學士 北島小太郎君
醫學博士 ●北里柴三郎君
醫學博士 ●三浦守治君
醫學博士 ●三浦謹之助君
小兒科專門 ●宮本仲君
理學博士 ●箕作佳吉君
醫學博士 ●三島通良君
醫學博士 ●三宅秀君
醫學士 ●三輪信太郎君
新潟 水野欽君
伯爵 土方久元君
醫學士 ●島村俊一君
醫學博士 ●弘田長君
ドクトル ●須田卓爾君
●ミス、ヒユース
醫學士 ●笹川三男三君
醫學士 波多野傳君
醫學博士 ●吳秀三君
八王子 和田義賀君



スマート女史

婦人衛生雜誌第百六十號（明治三十六年三月二十日發行）

演説

●吾々の住家と其保存法

附來客の事

ミス、スマート演説
三谷雅之助通譯

今日私が御話を致しまする事柄は、自分達の住んで居りまする家屋と其保存法、其他のことに就て色々御話を申上ようと思ます先づ其家のことに就て御話を致しまする前に、吾々も皆さんも成べくモウ少し暖かに爲したら宜いだらうと考へます、若も私が亞米利加に居りましたならば、斯う云ふ寒い場所には餘り長く居りませんストーブを焚かないで、暖かにする方法があります、其の身體を溫める仕方を言ひますれば、此處に居らつしやる皆さんが御立なすつて下さいまし、さうして肩の所を眞直にして足の指先て立ちまして、十二ばかり運動致しましたならば餘程暖かになります、さうして手を前の方へ眞直に御出しになるのてあります、其手を廣げることが或は出來ないかも存じませぬけれども、併し是れを爲さるならば必ず暖かになります、此養生法の研究を致しまする時に、身體を暖かにするのは、一の方法てございます、

此世界の中を見まするど、實に驚くべき奇麗なる物が澤山あります、是の驚くべき奇麗なるものが皆造物者に依つて人間の第一の喜びの爲に備へられてあるのてあります、此世界を旅して見まするど人間が又ありとあらゆる手段を用ひまして、住んて居る世界を奇麗にする爲に、驚くべき建物て家屋を建て、あります、吾々がそれを見まする時に、如何にして斯う云ふ驚くべき建物が出來て居るかと思ひます、英國に往つて見まするど云ふと、名高い「ウエストミニスター」などに就て人が頻りにそれを賞讃して

居りますが或は「スペイン」に往くと「アルハンブラ」と云ふ立派な建物があります、それから伊太利のセントマーク、セントピトター、魯西亞の「クレンプリン」土耳其の「モスクス」等も驚く可きものです、それから「エジプト」の「ピラミッド」其他印度の方に往つて見まするると云ふと非常に大きな寺が建つて居りまする、或は御國に參りまするると日光とか又は芝にある所の驚くべき建物があります、それから歐羅巴に於きましては實に宏大なる宮殿或は其他の立派な教會堂、其他澤山立派なものがあることを讀んだり或は聞いたりもして驚て居ります、それから亞米利加の方を見まするると、立派な商賣をする所の場所に實に宏大なる家を建てゝあります、其高さを見まする時には三十階も高い家があります、亞米利加の「スカイスレーパ」と云ふ實に驚くやうな高い家もありますが其他に立派な會堂や或は人の住家として實に美術の點からして驚くべき住家がありまする、東洋の方を見まするると云ふと、東洋の方は又それ〳〵立派な神社佛閣と云ふものがございまして、其宏大なるに實に驚くのであります。

只今申上げました通りに、世界中にあるさう云ふ立派な建物を見まするると云ふと、實に驚くべきものであります、人間が種々な力を以てそれを建てましたことを驚きまするが、それと同時に猶驚くべきものが吾々の上に一つございます、何千年と云ふ間、人間が此世界にありまして、立派なものを拵へて此世界を飾りました通り、又只今申す通り實に驚くべき所の立派なものよりも尚ほ驚くべきものは、自分の住んで居る此人間の身體と云ふ住家である、是れは實に奇妙なものであり、又實に驚くべき所の構造のものでございます、是れは天にある所の神が人間の上に與へた此人間を創造するに就て實に驚くべき又最も優れたる所の建方であるのであります、今日は殊に皆さんに殊更御清聽を煩したいと云ふことは、此世界にある所の人間が建てた家ではなくして、自分と云ふ者が住んで居る家で、此人間の住家、人間

の身體に就て御話をしたいと考へます。それて澤山な人々が考へますするのに、人間の身體は唯それだけのものだと思ふて居ります、併ながら是れは大なる間違ひてあります、「あなた」と「わたくし」と云ふものが此身體の內に住んて居るのてございまして何處にも身體から離れて行くことの出來ないのてあります、此世の中に死と云ふことがございます、若も其死すると云ふことが起つて來た時分に此家の內から人間を離れて往つてさうして知らない所の場所に移つて仕舞ふのてございます、それて此家に人が居ることが唯窓の中から戸外を見て話をするのと同じことて、それよりはどうしても以外へ出ることの出來ないのてございます、それて此人間の家と云ふことに就て初めて研究をして見ますると云ふと、丁度人間が世界の中に建てた家のやうてございます、世界の中に建てゝある家は、木て建てゝあり、或は煉瓦もあれば石もございます、其通りに此人間の身體と云ふものは丁度さう云ふやうに成立つて居りまする、人間の住家と云ふものは、人間の自由に委して又自分の思ひ通りに又思ふ所に運んて往くことが出來るのてございます、それて人間の住家と云ふものが四階に出來て居る、其四階に家を建ますのに二百ばかりの骨て出來て其二百ばかりのものを白い光つて居る柔かなそれは硬い打つても毀れない捻つても捻ることの出來ないやうな強いものて、それを悉く固めてあるのてございます、それて人間が自分の住む家を建てます時分には立派な大理石などてそれを、彫みまして、さうして堅固なる柱を建てます、丸い或は種々なる形の附いて居るやうなものが家の中にございます、此通り人間の住家の家にも矢張さう云ふ強い立派な柱があります、それは脊髓と云ふもので俗に短かく言ひますならば脊骨、其強い柱が人間の內にございます、此脊骨と云ふものは此家を建てますのに一番大切なものてありまして、一番上から下まで達して居ります、御國に於きましては地震が澤山ありますするので、長い間此

地震の爲に害せられないと云ふやうな家を建る爲に御研究になり色々企てゝ居らつしやることを承りました、併ながら未だ是れで充分だと云ふやうな建物はないやうに承りました、人間の此住家の建物に於きましては、地震のやうな震動が起ることがございます、度々さう云ふやうなことがございますけれども、併し是れが地震の害を受けないものでありまして、どんなに動いてもどんなに歩きましても、人間の身體の中にある所の色々の道具がそれが爲に損所が毀つたり或はそれが爲に動搖して役に立たなくなると云ふことはございませぬ、此四階の人間の住家が四階共に全く違つた所のもので出來て居るものでございます、一番上にある所の頭と云ふものは、丁度立派な丸天井であります、此世界に一番名高い聖　彼　堡の丸天井と云ふものは只是から形を取つたものに過ぎない、其次ぎに廻る所の樓を通りて三階に參ります其處には二十四ばかりある肋骨と云ふものがそこにございます、此室が餘程堅固に出來て居りまして、實に大切なものが此處にございます、それから又下へ降りまして二階が有て其室の構造は脊骨でございます其下に有る强き骨と連結して一階となる堅固な倉庫がございまして、其中に皆總てのものが置かれます、其下に足と云ふものがございまして何處までも運ぶことが出來る所の道具になつて居ります、それで此長い年月の間世界にありとあらゆる總ての人の建築學に於きましても、或は其他の機械を拵へる事に於きましても、人間の肢體が一番能き參考を與へると云ふことになつて居ります、家には壁がございまして、立派に見るやうにしてございます、丁度人間の家も矢張其壁がございまして、或は低くなつて居る所、或は角のある所を丸く致すばかりでなく、此壁と云ふものには餘程彈力のあるものでございまして、人間の此家をシツカリするやうに致します、其壁の數は五百ばかりございます、是れは人間の身體の筋肉でございます、さうして其壁が唯塗上げてあると云ふばかりでなく、自然に人

間の身體の内に運轉して居る器械であります、音も無く響もなく、静かに運轉をして居る、動く時分にも皆其壁の中に於て働きをして居るのであります、今少し時があつて詳く申上げることが出來ますならば、此人間の筋肉と云ふことに就て話しましても實に面白くございます、丁度此壁を能く防ぎまする為に、人間が建てました家の外部には奇麗な圍ひをして其上を色々に立派にしてありまする通りに、人間の住んで居る家の壁の外部も矢張それと同じやうなもので、ございます、それで大工が家を建てゝ居るのを見ますると、家の中には一番手を掛けて居ない荒い所の木が中の方にございまして、さうして外側の方に行くに從つて或は木を削りましたり、飾りを付けたり致しまして、其上にペンキなどを塗ります、併ながら人間の身體には、一番外部には荒い粗末なものがあります、外部は惡いが内の方へ這入れば這入る程實に立派なものになつて出來て居ります。それで前申上げる所の其人間の住んで居る家の外部を掩ふものは何であるかと言へば皮でございます、此皮と云ふものは只一つでなくして二つになつて居ります、其間には人間の脂と云ふものが這入つて居ります、それで此人間の住みまする自分の身体である家には外部の皮の方を塗つてはございませぬ、併ながら此皮の内側の方を塗つてございます、或者は淡紅い、白色或者は黄色或者は銅色黒色をして居ります、併ながら其色の着いて居る所を取つて見まする時分にはどれもこれも皆同じものであります、さうして其皮の所に驚くべきものは人間の排水管のやうなものが出來てあります、或は電氣の針金のやうなものもございます、其身體を自然立派に何時でも清潔にするやうなものが出來て居ります、さうして家の一番上の所には髪と云ふもので丁度家根を葺いたやうになつて居ります、又其色が種々變つて居りまして、大概其色は其身体の色と同じやうなものであります、さうして先づ此家の中を能く見まするとに致しませう。

第一番に上にありまする所の先づ天井のある一番高い所に這入つて見ませう、さうしますると此天井が首と云ふ小さな高い臺の上に載つて居ります、此一番高い所は實に堅固に出來て居りまして、其上を覆うてあるものは三枚がはり強いもので覆うて居りまず、なか〱之れは容易には、破れませぬ、何故ならば其中にあるものが一番大切なものでありまして、なか〱それが丈夫でなければならぬやうに出來て居るのであります、丁度御國の建物に比べて見まするると、此人間の一番上にありまする高い所が丁度土藏のやうに堅固であります、其家の中を奇麗に飾つてありまするのに立派な彩色の紙などではありませぬ、其家の中に飾つてありますのは三枚ばかりの奇麗な軟かな小さい所のものでございます、さうして細かいことは丁度蜘蛛の作る網のやうな實に細かいさうして粘腋のある質を有して居るのであります、此家の上の方に二つの窓がございます、此家の中にはタッタ二つの窓ほかございませぬ、併ながら此窓が二つで十分であると云ふのは、一番上の方にある建物は始終是れが廻つて居るのであります、さうしてどちらから見ても十分見ゆるやうになつて居ります、此窓には立派な窓掛けが出來て居ります、此窓掛は實に細かなもので實に能く出來て居る、此窓掛の裏を見まするると、赤い色の裏が付いて居ります、知らず識らずの内に此窓が開たり縮つたりして其度には何時でも窓の掃除が出來て居ります、さうして中に這入つて來てはならないやうな物が來れば直ぐに窓掛で蓋をして仕舞ひます、それから此目の窓の一番正面の眞中に一つの丸き穴がございます、眸子と云ふものでございます、夫れが大きくなつたり、或は小さくなつたりすることは明りが眼の上に現れて來まする多少に依つて始終變つて來ます、此窓から見まして此世界中に在りとあらゆる立派なものを中に居る者が見ることが出來ます、又此窓からして人間の内にある所の魂と云ふものが少しばかり其形を見ることが出來るのであります、此家

の中には狹くはございますけれども、實に大變多くの部屋があるのでございます、其部屋が色々に別れて居ります、中には事務室のやうなものがございます、或は應接の室、音樂堂、圖書館、或は愛情の部屋、或は平和の部屋、種々樣々の部屋が此内に在り、其他澤山ございますから、餘り長く此部屋を一々見ることが出來ませぬが、只一寸部屋の内を覗いて見ませう。

第一番に先づ此事務室の内へ這入つて見ますでございませう、それで此部屋の内に這入つて見ますると事務室が二つに別れて居ります、此事務室を腦髓と申します、さうして此腦髓からして始終家全體に色々の使ひを送り、或は色々の命令を致しまして種々樣々の事務を其中には執つて居ります、先づ此家の内をずつと見まする時分に、此家の中に這入りまして、自分の名を其處に留めて置いて、どう云ふ譯で此家を見に來たかと云ふ目的を其處で現はさなければなりませぬ、此次に參りまする所の應接の間に這入つて見るでございませう、此口に云ふ應接間は、二つの赤い戸が始終開いたり閉つたりして居ります、さうして其部屋の中に這入つて見ますると大概な御方には三十ばかりある白い衣を着た所の下僕が其處に待つて居ります、さうして其者の役目は何であるかと云ふと其處に這入つて來る所の色々なもの、應接間に持つて這入つてはならないやうなものをみんな取つて除けて奇麗にするのが役目でございます、それで此次に赤い衣を着て居る所の下僕が其處に居りましてそれの役目と云ふのは其中に這入つて來て良いものであるか惡いものであるか、中に運ぶべきものであるかと云ふことを始終撿べることを務めて居る舌と云ふものでありまして、次第々々に奥に導きて赤き幕の後の咽喉と云ふ一室に達しますと此室から家の内に在る凡ての部室に行き得ます此部屋の中に始終見舞に來る所のものがございまして何時もそれが無ければならぬものが來て居ります、それは空氣と云ふものです夫れに賴みまして、道案内をして貰

ひましよふ空氣でなければ行けない所の場所がございます、其空氣に連れられて參りまするど、次第々々に細い道の所へ參りまして其中には毛の生えて居る番人が居ります、其の一番終の方に音樂をする部屋がございます、此空氣と云ふ案内者は非常に音樂の上手な者でございまして、其中にあります所の音樂器には實に驚くべき所の發音がございまして、其中には十一音ばかりに別れて居る所の實に驚くべき樂調があります、一秒時間の間に四萬の違つた所の音を出すことの出來る實に驚くべき所のものであります、其音樂堂の中から段々に外へ出て行きますると、外側の高い二階の椽側のやうな實に立派な所へ出て參ります、其形は貝のやうになつて居りまして、外部の方に出て居りまする、耳と云ふものであります、音樂は隨分面白いものでありますから、其次にある一番奥に備へ付けてありまする所の音樂を見ますてございませう。

それは俗に言ひます所の氣管と云ふものでございます、そこには種々な聲が出て泣き笑ひ歌ひ又話しまして凡そありとあらゆる鳥或は獸の聲のやうなものまでも眞似をすることが出來る、或は其他の麗はしい所の音樂の調子を作る道具で實に奇態なものでございます、

其次に注意を惹起す所のものは圖書館でございまして實に稀態なものでございます其中にある書物は人に依つて色々違ひますが其中には小說など餘り人間の爲にならないやうなものもあります、又或人の圖書館になりますと云ふと數學もあり理學もあり或は又化學などの調べた所のものもあります、此等は皆其人に依つて其種類は色々に違つて居ります、其中には佛蘭西の書物、英吉利の書物或は羅典語、或は英語、或は日本語、種々樣々の國の言葉などもあります、それからして色々な字などございます、それは字引と云ふても宜い位な澤山なものが其處にございます、此書物は何時頃から集め始めたかと申せば此書物は子供の時から集めて居りまして集めた所の

ものは人に依つて色々違ひますが、併し此書物を用ゆることは何處に居つてもどう云ふ場合にてもそれを用ゆることが出來ます、デ此書籍室は即ち此人間の中にある所の記憶と云ふものであります、腦髓の内に働いて居る記憶力であります、書籍室と同じやうに又其室には美術的の置物が澤山ある部屋がございます、其中に這入つて見ますると、其中には種々様々のものが有りまして、何時頃から集めたかと云ふと矢張り子供の時から集めたのであります、其中には實に喜ばしく見る度毎に心に慰めを與へる物もあり、又何時も涙の種になる所の繪もある、或は永くそれを忘れてしまひたいと云ふやうなものもあります、又此美術館の奥の方に小さな部屋があります、是は想像力と云ふ小さな部屋であります、其處には色々の立派な考が起つて來て働いて居るのでございます、又其外には憎みと云ふ部屋もございます、其中には實に暗い怖ろしいやうな有様があります、或は妬みと云ふやうな部屋があつて其中には人の善き物を自分の物にして欲しいと云ふやうなことが現はれて居る、其部屋には怖ろしい憎みとか人を殺すとか云ふ怖ろしい罪が起つて居る、又其外には慾と云ふ部屋があつて自分が出來るだけ澤山な物が欲しくつて只僅かなものを他人に與へて遣ると云ふ實に不愉快な部屋があります、其他色々なる怖ろしい見るに堪えない部屋がございますけれども、其等は暫く見ないで其次の部屋に來て見ると愛情と云ふ實に麗はしい部屋があります、其中に這入つて見ると人の爲に盡し人の爲に自分の身を犧牲にして努めると云ふ立派な何人が見ても樂しきものがあります、此愛情と云ふ部屋から中に這入ると其奥に平和と云ふ部屋がございます、其部屋は實に貴い所のものであります、其部屋が此世界の人類を作りたる神に交はる部屋であります、さうして其部屋は人間の心の中に眞の平和と眞の安心を與へ其中で人間の疲れた身躰に休みを與へ慰みを與へ人間をして清らかな立派なものとする場所であります。

只今申上げる通り總て此等の色々の部屋が人間の住んで居る家の一番高い所の部分に悉くあるのでございます、二つの窓の間に外へ出て居る所の椽側があります、其椽側には屋根が付いて居る、さうして二つの這入つて往く入口があります、それで先に頼みました道案内をして吳れる空氣に伴はれて段々奥へ這入つて見ると、屋根のあります道がずつと付いてありまして次第々々に奥へ這入つて往くに從ひ氣管と云ふ場所に來る、それから二つに別れて先に往くと肺臟と云ふ部屋に參ります、其部屋の中は大變な大きな仕掛の洗濯場でございます、其洗濯を致して居る場所はどう云ふものであるかと云ふと其處へ集つて來る人間の命の川である所の血が其中で洗濯されるのである、色々の汚い物が其處へ集つて來ると云ふと、それを立派に奇麗にして送出するやうになつて居ります、それで今來ました道筋を段々這入つて往くと肺臟の一番奥の細くなつた穴の一番先には洗濯をする盥がある、其中に空氣が這入つて汚いものの奇麗に洗濯して居ります、其小さな洗濯する盥の數は實に驚くべき數でありまして、小さくして見ることの出來ないものでありますが、殆ど六千万以上のものが備つて居ります、其命の川である所の血が汚つて來る道で色々な汚ないものを皆集めて洗濯場へ持つて來るのであります、すると洗濯場の中にある澤山ある盥の中に持つて行つて實に奇態な仕方で今迄で眞黑であつたものが赤く美しいものになつて他の方へ送つて遣られるので家と云ふものが保存せられ壞れてもそれで慣はれるやうに實に良く出來て居ります、人間の身體を保存して居る、其洗濯場である所の肺臟の直ぐ側の方に大きな一の喞筒がございます、それを心臟と申します、其機械と云ふものは實に珍しいものであつて家が出來初めると直ぐに其機械が出來上つて居る、さうして其家が壞れて一番終りまで働いて居るのであります、其機械の運轉が止つて仕舞ふと家の內の人が其處を立去つて仕舞ふのであります

其次に二階へ降つて見るとそれは此家の臺所であります實に奇躰な場所で胃の腑と申します、それは三つの强い壁がございまして其中には胃汁と云ふものがあつて、中へ這入つて來た色々な肉だの或は野菜などを細に切つたり皮をむいたり種々な働きをして其間には能く混返して揉んで居ります、其臺所から次の部屋へ通つて見ますと云ふと臺所で用意されたものが此食堂に移つて居ります、其食堂は細長い部屋で凡そ二十尺もある其中の壁の周圍を見ると一面に少さき穴が付いて居りまして胆汁等の助けで臺所で用意された極く細かな物が其穴に這入てそれが命の川と云ふ血になつて身躰の內に及んで來るのであります、其食堂のありまする邊臺所のありまする邊が家の中でも一番廣い部屋で其處には家の中を暖める暖爐があります、肝臟と申します、其中で始終身躰を暖かにして働いて居る、其一番下の部屋が主に色々のものを貯藏をする爲に設けられて居るのであります、それから一番下に居ります所の下男は每も一番上にある所の事務室から命令か來ますと云ふと主人の命令通りに從つて居ります、それから此家を護る爲には五人の番兵が始終付いて居ります、それの役は見ること聞くこと嗅くこと味ふこと觸れること、此五つの者は家が損はれないやうにと護つて居ります。

只今申上げますやうに此家が出來て居つて、どんな組立てあるかと云ふことは畧々皆さんも御承知であると思ひます、然らば此家をどうしたならば始終損害を受けることなく立派に奇麗にして住つて行くことが出來るかと云ふことを少し申上げたいと思ひます、例へば世の中の誰でも自分の金で家を建てゝそれが出來上つて誰か好い世話をして呉れる人に渡し、其家を人に貸すとすれば其家がどう云ふ風になつて行く、又どんな風に修繕を致さなければならぬかと云ふことは其委托をされた人の責任であります、若しも其人が家に就て爲すべき事を怠る時に於ては罪は其人にあることであります、唯今申上げた

所の自分の住んで居る身躰の家と云ふものが皆一人々々に預けられて居るので自分の家を大切にし自分が家を能く保つて往く非常な大なる責任を持たせられたのであります、永い年月の間世に在る所の澤山な醫學士がそれ等のことに就て非常に研究を致しました、さうして此人間の住んで居る家は如何にして健康に保つて置かなければならぬか、どんなにして始終修繕をして置かなければならぬかと云ふことは非常に注意をして研究されて居るのでございますが、只其僅かの所を今申上げたいと考へます。

それで澤山な人に依つて研究されました中にも養生法に依つて考へ或は人間の健康法に依つて考へた人達が脊中を眞直にしまして、立つて歩くこと、或は座つて居りましても身躰を眞直にして居ることが實に人間の身躰を美しく又健康にして往くものであると申します、それで或人は此身躰を非常に低くゝしまてまへの方に長くスツト出し屈んで居るやうな人があります、是は非常な健康を害する、又さう云ふことをするに依つて知らず識らずの中に身躰を非常に弱く醜くするものであります、それでありますから、立つて居る時も歩く時も車に乗る時にも眞直にして居ると云ふことは大切なことであります、極く若い時分には人間の身躰は實に柔かいものでありましてどうにでもなるものであります、それでありますから膝などを屈げまして座つて居ると云ふやうなことは發達を害するものであります、ソレに依つて丈の低くなると云ふこともあり又た身躰に變化の起るといふことは能く明かなことであります、

又何か重荷を脊中に脊負いまして前の方に屈るやうにして居る時分には非常に身躰を害するばかりでなく神經の上に非常に影響を及ぼします、又肩をすぼめて歩くやうなことが非常に害になるのであります、

それから此家の外も内も清潔にして置かなければならぬものであります、例へば此外側にある所の皮などゝ云ふものは始終洗つて清潔にして置かなければ

なりませぬ、それから內部にあります所の心臟も筋肉も總てのものが皆適當の運動をしなければならぬ、例へば腦髓のやうなものにしても一日の間に少なくとも二時間位は十分に働きをしなければならぬ、其働きと云へば勉强することである、又休むと云ふことが人間にはなければなりませぬ、何誰にしても七時間或は八時間は二十四時間の內に十分に休む時を拵えなければならぬ、身躰を健康に保つと云ふことが必要であるならば其時間はどうしても拵えなければなりませぬ、又昨今の如く始終氣候の變ります時にも衣服を重ねて身躰を暖かにして居ることが必要であります、木綿、絹、毛で拵えた衣服皮で拵えた衣服などを着て暖まりまする、此中で肌に直ちに接する所のものは木綿物が最も好いと云ふものは此木綿物は暖いことも冷たいこともなか〳〵容易に引受けることの出來ないものであるから之が最も好いものであります、衣服の改良と云ふことに就ては色々のものがあるが唯一の從ふべき法は餘り窮屈にしないと云ふことが一番宜い、衣を着たが爲に身躰が非常に心持善く手足の働きの自由になるが好いことでございますそれから此身躰の肌に着いて居る衣は始終それを晝と夜と取換へるやうにして、寢る所の道具は成るべく始終奇麗にして能く空氣に當て或は大陽の光りに能く曝して病菌などの無いやうにしなければなりませぬ、それから新らしい所の空氣を始終能く用ゐると云ふことは最も大切なことであつて若し不潔の空氣が身躰に這入つて來ると、それが爲に恐るべき病氣に罹ることがあるから成べく新らしい空氣の流通を良く致し、水などの古くなつて居るやうなものは早く打棄てゝしまふやうにして、さうして每日屢々十分に大きな呼吸をしまして肺を擴げると云ふやうなことも必要であります、それから髮に就ては始終能く之を櫛り其上にブラシを持て能く髮をとき餘り油などを付ける必要はございませぬ、何となれば此髮と云ふものは天然に油を有つて居るものでございまして、櫛を用ゐブラシを用ゐて

居る時は天然の油で何時でも奇麗になつて居るものでございます。

又此口の中にあります三十二ばかりの白ひ衣を着て居りますものは、始終之を洗つて奇麗にして總ての不潔物は全く除けてしまふやうにしなければなりませぬ、

それから窓である月と云ふものは薄暗い時に物を見たりなどすると害のあるものでありますが、又光線の非常に強い所に居つても害があります、或は光線の始終動いて居るやうな所に居るが尚ほ非常な害のあるものであります。

それから音樂堂の入口である耳は十分に能く奇麗にして置かなければならぬ、併しそれを奇麗にするが爲に餘り堅いものを用ゐたり或は其中に溜つて居るものを取除けるに就て酷いことをするのは良くございませぬ、非常に鄭重に大切にして拭かなければなりませぬ、若しも必要であるならば極く僅かな油を中に入れます時には直ぐ取れる、又耳元で非常な高い聲をしては宜くない、或はそれがために耳が惡くなつたり聞えなくなるやうなことが屢々ございます。

此人間の身躰の歷史と云ふものは始終補つたり或は損したりして居るものでございます、さうして人間の用ゐる所の食物に依つて始終補はれて行きます、働いては損じ損じては又其用ゐる所の食物に依つて補はれて居るのでございます、

又食事と云ふことが凡そ日に三度、他の言葉に依つて申しますれば五時間毎に用ゐると云ふことは適當なことでございます、其上に他のものは食べると云ふことは臺所にある食堂の壁を非常に害する故に注意して能く撰ばなければならぬものであります、例へば用ゐる所の肉とか、米とか或は馬鈴薯バタのやうなもの、さう云ふものは如何んな氣候に於きましてもどんな所へ往つても人間の身躰を健康に養つて行き補つて往く大切なものであります、聖書に敎えられてあります所の食物に就て斯う云ふことがござ

います。

汝等食ふにも飲むにも何事を行ふにも凡て神の榮を顯すやうに行ふべし

是はどう云ふことであるかと云へば、人間の道理を用ゐ健康を損はないやうに、注意をして用ゐよと云ふことであると思います、それで御婦人方の責任としまして一番大切なるものは只今申上げました通り人間の身体に必要なる食物を撰ぶと云ふことが最も大切なことであります、一家の中にある妻とし母とし姉妹とし誰でも責任を免れることは出來ない、さうして用ゐる仕方に依ては善にもなり惡にもなる所の非常な強い所の武器を持つて居るやうなものでございます、さうして是は御婦人方の有して在らつしやる非常なる特權でありまして、身躰の健康のために其適當なる食物を撰んでそれを强壯の爲めに用ゐるのは最も大切なる又最も非常に大なる所の責任と特權でございます。

人間が世界に於きまして家庭と云ふものを作ります、其家庭は人に依つて作られて居りまして、其家には始終誰か訪ねて來る客がある、併ながら其客の中には悉く善い者ばかり來ると云ふ譯には參りませぬ、其中には或は來ては家庭の爲にならないばかりでなくそれがために非常な侵害を蒙るやうなことも此世界に屢々ございます、其如くに此人間の住家である所の身躰の中にも矢張り食物と云ふ來客がございます、其中には立派に强壯にして往く所の食物もありますが、それと反對に此身躰を壞しそれが來る爲に身躰が非常に弱くなつて靑さめるやうなことがございます、それから來客に就て御話したいと思ひますけれども、モウ時も餘程過ぎましたから餘り此處に於て皆さんが長い間御座りになり其上寒くて御心持の好いものでもないと考へますから今後機會があつたら述ると致しませう、第一に此の身躰を奇麗にし得る所のものを以て此身躰を次第々々に强壯にし、さうして其損害を防ぐやうに注意すると云ふてとが最も大切なることゝ考へます、

家庭看護法

（前號の續）

醫學博士　三宅秀　述

佃事務所員速記

今日は飲料の中、酒に就てお話致します、酒と申しまするものは、賞める人は百藥の長だと申しまする位でありますから、大概の藥を飲ませるよりも酒を飲ましたならば、病人がそれで癒つて仕舞ひさうなものでありますけれども、又酒の害を喧しく申しまする者になりますると、達者な人ですら酒を飲みますると云ふと其爲めに病氣になると云ふ位怖いものであつて、酒は一番毒になるものだと、斯う云ふ工合に申して居ります、詰り酒に就ての論は兩極端に走つて居りますから、一方は頻りに褒める、一方は頻りに其害を唱ると云ふやうな譯であります、若しも酒が左程毒になりまするものならば、無論看病法の中て話すべきものでないのであります、けれども用ゐる場合に依りますると、病人に大層利益を爲すことがありまするから、酒と云ふものを全く捨てゝ仕舞ふ譯には參りませぬ、私が爰で酒のお話を致しまするのは、丁度其中間に立つて、病人に用ゐて宜い部分だけをお話を致して置きます、酒と申しますると誰も日本酒、即ち日本の清酒を考へまする、それが當然な譯でございます、然るに是迄日本の酒はどんな良い酒でも病人には飲ませないものゝやうに心得て居つて、病人に飲ませるには必ず葡萄酒か其他の西洋酒でなければならぬやうに考へて居る人が多いのであります、是は間違ひでありま す、日本の酒若くは味淋抔でも、葡萄酒の惡るいのから見ると云ふと、病人に用ゐて矢張り益になるのであります、病人に用ゐるのは葡萄酒其他の西洋酒でなければ其用を爲さぬと云ふ考は間違つて居るのでありますから、其考は捨てゝ仕舞はなければなりませぬ、併しどの病人にも實際酒を飲ませて宜いと云ふものでは決して無いので、ある病症次第で

酒が害になりますからして、さう云ふ時には酒は捨てゝ仕舞はなければならぬのであります、然らばどう云ふ病人には酒が宜しくないか、酒を忌むべき病人はどう云ふ病症のものであるかと言ひますると、酒を飲んで大層酔ひが早く廻るやうな、病人酒を飲んだ爲めに色々な刺激のあるとき即ち痛みが増す病氣には宜しくないのであります、例へば頭痛のするときだとか、或は歯の痛むときだとか云ふものは、大概實驗上酒が宜くないと云ふことを素人でも知つて居つて酒を飲ませないのである、總て頭痛や歯痛みのやうなものでなくても、其外何處か身體の一部分が焮衝して、腫れて居るとか痛む場所があるとか云ふ場合には、酒は宜くないと云ふことになつて居るのです、それ故に若し之を藥酒にして、藥の代りに酒を一つ飲んで見やうかと思ふときには必ず醫者に聽いて見るが宜しい、醫者がそれは宜しいと贊成して呉れたならば酒を用ゐて宜しい、さうでなくて自分一個の素人考で、斯う云ふ時には宜からうと思ふて酒を飲みますると、大きにそれが間違ひになることがあります、て酒を用ゐて宜い病症は如何であるか、どう云ふ時に一番酒の効能が顯はれるかと云ひまするると、病人が永く煩つて居りまするか、或は急に重い病氣に罹つてさうして身體が衰へて、心臟の働きが惡るくなつたりした時には、是非醫者の方から酒を勸めて酒を藥として用ゐるのであります、此場合には酒に代はる程の藥もありますけれども、先づ何處の家にも在つて、さうして手近で飲むのにも甚だ便利でありますからして、酒と云ふものが廣く看病のときに用ゐられるのであります、それから今一つは長病の爲めに身體が衰弱して居る場合此場合に滋養物を澤山食べさせると同時に酒を少しづゝ藥にして遣る、それが先づ看病法として病人に酒が採用される場合なのである、

扨て酒を飲ませまする時分に其分量でありまするが、どうも酒と云ふものは銘々其人に依て量が違つて居りますもので、平日酒の好きな人、酒を食べ習

つて居りまする人は、下戸の二倍も三層倍も持つて行かなければ可けない勘定で、一向定まらぬものてある、酒の種類に依ても違へば又其人次第に依ても違ひまするから、酒を用ゐる時にはどの位な分量で用ゐろと云ふことは此處では申されませぬ、強い酒もあり弱い酒もありまするから、強い酒は少し用ゐる、弱い酒は澤山用ゐると云ふことは勿論のことてあります、又人々に依て量を異にして居りますから此處て概論する譯には參りませぬ、矢張り其分量も、どの酒をどの位飲ませて見やうと思ひまするがそれて宜からうかと云ふことを醫者に相談をして、さうして病人に遣る方が宜しい、

それから酒を飲みまするのに冷やて飲むのと燗をして飲むのとある、日本酒てありまするると、必ず燗酒にして飲むことが常の飲み方てあります、無論日本酒を飲みまするならば必ず燗をじして飲む方が宜からうと思ふ、殊に酒を飲んて身體を暖めてさうして汗ても取らうと云ふやうな時分には、唯だ徳利に入れて燗をする許りてなく、玉子酒杯に致しまする時分には、砂糖と玉子とを酒の中に入れて、それに湯を注いて鍋て煮ると云ふ位にして、餘程酒を薄くし倘ほ熱くして食べるのてあります、只の燗酒て飲むよりも今一層熱くして熱い内に飲む、是は酒を熱くして汗を取る目的てありますから、酒の分量は少くしてさうして湯を割つて酒を稀くして飲ませる法てあります、て西洋の酒は決して燗をして飲まないやうに人が覺えて居りまするけれども、矢張り葡萄酒を燗をして飲ませる飲ませ方が西洋に幾らもあります、どう云ふ場合に葡萄酒を燗をして食べるかと云ふと、矢張り感冒に罹つた時分に日本ならば玉子酒を飲む、それと同じやうな塲合に葡萄酒を熱くして飲みます、それには砂糖を混せましたり、それから肉桂だの丁子だのと云ふ匂ひの良いものを混ぜて、是れに湯を入れて鍋で煮て熱くして飲みます、さう云ふ工合に葡萄酒を冷やて飲まずに熱くして飲みまするのは、矢張り感冒に罹つた時に汗を取る爲めに

用ゐたり、又は下利を催ほした時分に、腹下しを止めたり致しまする時分に飲むのであります、それから病人がガタ／＼と震へるやうに強い寒氣の致しまする時分には大層氣分の惡るいものでありますから氣分が引立つやうにする爲めに酒を燗して熱くして食べます、さう云ふやうな工合でありますから、必ずしも葡萄酒は冷やて飲むものとは限らない、西洋でも身體を暖めやうと云ふ考のときには、矢張り同じ葡萄酒でも湯を割つたり或は火に掛たりして、燗酒にして飲む法があるのでありますから其事も知つて居つたら宜からうと思ふ、それから

今東京市中抔に賣物にありまする彼ラム酒は、極く善いと褒める程でもありませぬけれども、格別惡るくはないやうであります、あのラム酒と云ふのは中々強いものであります、當り前の日本酒の先づ倍ほど强うございます、それ故に先づ倍の水を入れて稀めた所で、當り前の酒位の强さになつて居りますから、酒の飲めない人、或は婦人だの小供抔が飲みまする時分には、水を三層倍にも四層倍にもして稀くして、燗酒にして食べる、玉子酒にして食べると云ふやうな時分には日本酒の代はりになります、日本酒よりも些ッと強い酒が欲しいと云ふ時分には先づラム酒を用ゐて宜しい、それでなければブランデーを用ゐて宜しい、所がブランデーはラム酒から見ると又倍ほど強いものであります、日本の酒を一と立てまずると、ラム酒が二になつて居りそれからブランデーが四になつて居ると云ふやうな工合に、ブランデーと云ふものは餘程強いものでありますからして、極く強い酒を飲ませたい、塲合に用ゐる病人が俄かに容子が惡るくなつて來て、さうして息も絶え々々になつて來たとか、手足の先きが冷へて來たとか云ふ時分に、弱い酒を飲ませて居つては氣が付きませぬから、強い酒を飲ませる、斯う云ふ塲合にはブランデーが至極宜しうございます、ブランデーが無ければラム酒でも宜しうございます、日本の酒抔はさう云ふ時分に到底間に合はぬのである。

今迄は烟酒の方を頻りに申しましたが、今度は酒を冷くして飲む方を申します是はどう云ふ場合かと云ふと、吐氣のある病人で、頻りに胸か惡るくて吐氣があつて堪らないと云ふ時にはシャンパンが宜しいシャンパンの中に氷を入れて極く冷くして飲ませますると吐氣が止まります、シャンパンには强いのと弱いのとありまするけれども、先づ女小供に飲ませまするのには、シャンパンの中の酒氣の極く薄いのが宜しい、それに氷を入れて冷やして小さい猪口に一二杯づゝ飲ませる、さうしますると今の吐氣を止めるには至極宜しい、それから身體の養ひを取らうと云ふ時分には、ポート酒或はセリー酒、それからマルサラと云ふ處で出來ますマルサラ酒と云ふのがあります、**是抔は餘程上等の酒であります、**さう云ふ酒は長い病人で身體の衰へて居る者に、少しづゝ藥酒として食事の時に飲ませるのに至極宜しい、私は日本の酒を頻りに賞めましたけれども、日本酒はさう云ふ場合になると云ふと、味淋も餘り効能がありませぬし、それから淸酒、當り前の淸み酒も格別の養ひになりませぬ、何ぜかならば酒の中に少しも滋味もなければ甘味もない、西洋の酒は葡萄酒でも其他のポート酒でも甘味があつて、匂ひも旨い匂ひを持つて居つて、中には滋い味ひを程能く持つて居る、さう云ふやうな味ひが色々混合して居りますから、酒が大層養ひになる、さう云ふ効能の有る西洋酒があるものでありますからして、病人が飲むのには葡萄酒でありさへすれば障らないものと思ひ、さうして何時でも病人の爲めに役に立ものと思つて、藥酒とさへ云ふと必す日本酒を捨てゝ仕舞つて葡萄酒を飲ませますけれども、葡萄酒は中々良いものが少ない、街で一ト通りの見世で買ひますると、どう**も養ひになる病人の爲めになると云ふ程の好い酒が**得難いのであります、思ひ切つて法外に價を充分に出して取りましたらば、兎に角害になる酒はございますまい、けれども唯値段を高く拂つた割合に良い酒が手に入ると云ふものではありませぬから、それ

故に無闇に何でも西洋酒でさへあれば病人に用ゐて宜いものだと云ふ考は止めて戴きたいのであります、それから又葡萄酒の中に色々な藥を入れたのがありまして、機那葡萄酒とか、或は機那鐵葡萄酒だとか云つて、身體を健康にする藥を葡萄酒に混ぜて、さうしてそれを一つ飮んで居りますると、鐵劑も這入つて居るし、機那劑も這入つて居ると云ふやうな工合で試に便利な藥酒が澤山あります、其酒も矢張り單純の葡萄酒と同じやうに良い方の種類のもので價が高く上等に出來て居る所の藥酒ならば必ず宜いのでありませうけれども、兎角値段を安く致す爲に本物を用ゐませぬので、唯だ苦い味ひを附けやうとして機那を使はずに外の藥で苦くして見たり、澁い方にする時には外の藥で澁くしたりと云ふやうな工合で、どうも正しい上等の品は市中で得難うございます、是れが西洋酒の缺點である、若し上等の酒ばかりで惡るい酒は市中に無いと云ふことになりましたならば、其時には私共は大に御勸めをする、日本酒は病人に宜くない西洋酒が宜いから御上りなさいと云ふて御勸めする、唯だ西洋酒を賞めたが爲めに、何でも西洋酒を用ゐると云ふことになりますると大いに誤りますから、私は諄く其事を申すのであります、

それから普通用ゐまする所の葡萄酒の効能を云ひますると、葡萄酒は澁味がありまするからして、其澁味が藥になりまするので、腹の下りまする時分には葡萄酒は宜しうございます、腹の下りさうな時や、腹の下る癖のありまする人は葡萄酒を始終用ゐますると、腹が緊つて來る、其代りに又通じの遠い人は葡萄酒を始終用ゐますると、餘り緊り過ぎて却て惡るいと云ふやうな結果を來たす、さうして腹の緊る方の傾きを持つた人は赤い葡萄酒は宜しくない、斯う云ふ腹の秘結し易い、通じの遠い方の人の爲めには林檎酒が良い近頃東北地方の岩手縣、靑森縣邊りで以て澤山林檎を作るやうになりました、東北諸縣では大抵どの縣でも林檎が澤山出來ます、其林檎は

旨く食べられるのは最も僅かな間である、勿論翌年迄も貯つて置きますけれども、それにしても生の果物でありますると云ふと、限りもなく貯ふて置くと云ふ譯にはゆきませぬ、此場合に於て澤山出來た所の林檎を取つて酒を拵へます、彼の林檎酒と云ふは英語で謂ふサイダーであります、林檎を搗き碎きて置く時は其液の中で幾らか其中で醱酵して酒を生じ林檎酒と云ふものになる、それは腐敗を防ぎまするに難い位の極く弱い酒であります、日本の酒や又普通の葡萄酒抔から見ると餘程弱い、一躰女や小供抔には酒は勸めべきものではありませぬけれども、此サイダーならば女小供が飲んでも宜のであります、さうして此サイダー所謂林檎酒は餘程酸味を帶びて居りますから、便の通じの遠い人が食べますると自然に通じが宜くなります、御婦人方抔には便の通じの遠い人の方が有り勝ちのものであります、それ故に葡萄酒を飲むよりは、どうかして此林檎酒を廣く造つてさうして之を一般に用ゐるやうになつたならば至極宜からうと思ひます、亞米利加邊りでは果物が澤山出來る國でありまして、色々な果物から拵へた產物が出來まするが、就中林檎酒抔のやうなものは澤山拵へて廣く用ひられるやうにしてありますが、吾々も酒の類の中で害が無くて利がありまするて、此林檎酒の如きものは至極宜からうと思ふ、

それから麥酒でありますが、麥酒は今迄申した所の林檎酒や葡萄酒とは丸で違ひまして、是は日本の酒に極く類似したものでありますが、獨逸では麥酒を澤山用ゐるので頻りに麥酒を賞めて居ります、然しながら無闇に此麥酒を賞めるのも氣が知れない譯であります、麥酒ならば幾ら飲んでも害の無いやうに麥酒好きの人は褒めまするけれども、それも誤りである、麥酒も矢張り酒の種類でありますから、大きな麥酒コップに何杯も瀦り付けた日には、少々づゝ日本酒を小さい猪口で飲んで居るのと其理窟に至ると同じことであります、其酒精量の〆高に至るとどちらも同じ害を爲す、唯だ麥酒の善いことは私が林

檎酒を勸めたやうに、亞爾個保兒分が極く少くして餘程弱いものでありますから、それだけは安心であります、併し弱いから利きが惡るいと云ふので澤山飲んでは矢張り害になる、けれども其弱いのを程能く飲んで居りますると至極宜しい、又此麥酒は飲んで味が惡るい、即ち苦みを持つて居る、日本の酒には苦みはありませぬけれども麥酒には苦みがあつて、大層腸胃を丈夫にする働きを持つて居ります、それがマア麥酒の効能である、それから英吉利邊りには獨逸抔の麥酒と違つて、スタウト或はポーター抔と云ふやうな色の眞ッ黒な、丁度醬油のやうな色をして居る麥酒があります、是れも矢張り獨逸の麥酒と同じやうな工合に苦みを含んで居りますから、腸胃の弱い人が飲んでも宜しいし、それから身體の虛弱な人抔か飲んでも宜しい、又重い病氣を煩つて其病氣が段々回復に趣く時分に、其回復を助ける爲めに飲んで宜しい、若し麥酒をもう少し滋養物の代りになるやうにしやうと思ふたならば、玉子麥酒と云ふものを拵へて飲むのが宜しい、是は玉子の蛋黃と砂糖と交ぜて置いて其中に麥酒を入れるのであります、玉子の蛋黃が滋養物であり、砂糖が滋養物であり、それに苦みを含んだ所の麥酒が這入るのでありますから、味が旨くて身體の養ひになる、是は極めて理に適つた飲物であります、

先づそれだけが酒の種類でありまして、大概私の今言ひましただけの範圍で、其以上に超えないやうにして行けば宜しい、さて酒を病人に遣らうと云ふ時分には、何時でも前以て醫者に聽いて、醫者の許を得てから飲ませると云ふ心得でありましたならば、必ず害が無くして其病人の爲めになるだらうと思ひます、是れで先づ一ト通り病人に與へるだけの飲食料と云ふものは終りました、

是れから續きまして其飲食物を病人に遣りまするのにどう云ふ目的で遣るか、或はどう云ふ病人にはどう云ふ飲食物を遣るか、今迄は一つ々々に葡萄酒が斯うだとか、麥が斯うだとか、米が斯うだとか、魚

はどうだとか云ふ工合に、一品づゝ品物で論じて參りましたが、今度は其飲食物を纏めて病人に食はせるやうに、一つの料理獻立と云ふやうな工合に、飲食物を三つ四つ宛組合せて用ゐることを少し許りお話致して置かうと思ひます、通例病人に食はせる物は何でも輕い物、飲食物共に輕い物〳〵と云ふて居りますけれども、どの病人を摑まへても輕い物を食はせると云ふのは大きに間違つた話であります、又外科的の病人で、即ち腸胃が惡るいと云ふのでもなければ、肺が惡るいとか心臟が惡るいとか云ふやうな、身體の内に病氣のある者でない、只外部の怪我でもしたと云ふやうな者は、少しも食養生はするには及ばない、常の通りの食物を食つて居つて宜い病人も澤山あります、右のやうに食物を別にするに及ばぬ病人もありまするし、或は食物を嚴重に言ゝて少しても形の有る物を忌み、お粥も食べては惡るいと極く喧しく言はなければならぬ病人もありますから、其病人の區別て以て飲食料の違ひまする所を申して見ませう、

通例之を九通り位に醫者の方で分けて居ります、先づ其第一は潤澤食料と云ふ獻立があります、潤澤食料と云ふものは食物を澤山食べさせるのであります、或は厚味の食料と云ふものもあります、食物を分つて厚い方の食物と、それから淡泊な食物即ち薄い方の食物と斯う二つに分ちます、それで厚味の食料、又潤澤の食料はどう云ふ人が用ゐるかと云ふと、重に外科の病人である、身體の何處かに怪我をしたとか云ふやうな場合には何も食養生をするには及ばぬ、健康な人と同じ食物を食べて宜しい、吾々の今日食べて居るのは潤澤食料を食べて居る、充分に身體の養ひになるやうな旨い物を擇んで食べて居るので、それは矢張り厚味食料であります、外科的の病人は他の病人が食ふやうな物ではない健者が平日食べて居る物で宜しい、それから内科の方の病氣でも、或は熱病抔に罹つた場合でも、固より熱のある内は厚味は可けませぬけれども、熱が解めて仕舞

つて、段々と舊に回復する時分にはもう潤澤食料を食べて宜しい、吾々が平日食べて居る物と同じ物を食べて宜しい、さう云ふ普通の物を食べて宜いと云ふ種類の病人は世の中に澤山あるのであるから、病人と言へば必ずお粥に梅干を舐らせて置かなければならぬと云ふ筈のものでは決してない、

それから第二には淡い方の食料、淡泊食餌、是は常に人が知つて居りまする通りに、病人とさへ言へば何時でも食を輕くして、淡泊な物を食べさせることにして居ります、先づ普通の輕い病人には淡泊食事が適當して居ります、病人に食はせる時分の献立は成るたけ輕い物を擇んで食べさせるが宜しい、何ぜさう云ふ工合に輕い物を食べさせなければならぬかと言ひますると、先づ病人と云へば運動を休んで動かずに居る、或は寢て居ると云ふやうな場合ですから、成るだけ平日食べて居る重苦しい所の食物は避ける方が宜しい、それから又病人自らも自然に食氣が無くなつて來まして、平日旨い物だと思ふて食べて居る物も却て欲しがらなくなる、病人の好みに任せても矢張り淡泊な物を病人が好やうになります、脂氣の多い物やそれから不消化な堅い物が宜しくない、飲料の中でも酒抔は先づ食べない方が宜しい、然ればどんな物が宜いかと云ふと、玉子、野菜、それから柔かい御飯、果物抔は煮て用ゐる、それから雞肉や小鳥の肉のやうな總て柔かい肉類がよい、此場合には御飯を食べても宜い位なのですから麵麭を食べても宜しい、それから牛乳、或は平日酒を飲んで居りまする人ならば今の麥酒とか、葡萄酒の良いのか、それでなければ日本酒の少々位は許して宜しいのであります、それから茶の濃いのや珈琲の濃く煎じたもの抔は、此前申しました通り淡泊食餌の時には宜しくないのであります、それだけが淡泊食餌と云ふものであります、

それから第三番目には輕減食餌である、食料を輕く減じた所の食餌献立て腸胃に病氣のあります人には此輕減食餌と云ふて、分量を輕く減じた食物を食は

せなければなりませぬ、常の如く食べさせて居つては害がありますからして、食物の分量を輕くして淡泊な物を遣つて置く、少しでも熱のありまする時分には必ず此輕減食餌と云ふので、第一に此食物の分量を少くする、さうして輕い物を食べさせる、斯う云ふ場合にはどんな物が宜しいかならが、牛乳、ソップ、粥、ビスケット、饂飩粉で拵へた菓子、それから此間申しましたチヨクレートのやうな物、そんな物が宜しい、最早淡泊食餌の時に茶や珈琲の濃く煎じたものは可けないと禁じられて居るのでありますから極く淡いものを遣る、熱杯のある時には咽喉が乾く、其時分に茶を遣つて可けぬこともありませぬけれども、遣るならば極く淡くして遣が宜しい、それから其次に液躰食餌、是は餘程食養生の嚴重な場合であります、流動躰でなければ食べさせて惡るいと云ふ時です、少しでも形の有る物はお粥でも可けない、粥汁のやうなものでなければ可けないと云ふ場合です、西洋では此時分に日本の汁粥と云ふものがないものですから、麵麭を湯で煮まして、さうして其上淸みを飮ませるやうなことがあります、極く軟く麵麭を煮ましたのですけれど尙ほ形が有るのでは宜しくない、それで上淸み丈けを取つて丁度日本の粥汁と同じやうなものを食べさせる、液躰食餌と云ふ時には食物の一番嚴重な場合であります、其流動物を食べさせるのですら一度に澤山食べさせては宜しくないので、少しづゝ度々に切つて食べさせると云ふやうにしなければならぬ、先づどんな時に斯云ふ嚴重な食餌を醫者に命ぜられるかと云ふと、窒扶斯に罹つたときである、熱が强いと同時に腸の方に病氣が附いて居る即ち腸窒扶斯のやうな時分には、此液躰食餌を醫者が必ず命ずることになつて居る、其時に看病をする人が此位な物は宜からうと思ふて、少してもそれを緩めまするど必ず醫者に發見される、醫者が二度目に回診に來て、何が食物が惡るかつたらう、私の言ふた事に背いたらうと糺すと、實は斯う云ふ物を遣りました、餘り病人が欲しがる

から、カステラ抔は湯にでも浸せば随分柔かになるから宜からうと思ふて遣りました、と斯う云ふやうな遣り損の例が中々諸處にあるのであります、此液軆食餌と云ふものは嚴重な食餌で、醫者が之を命ずる時には重要の時でありますから、此位な物は少し位い遣つても宜からうと云ふやうな自分考を起さないやうに戒めて置きます、そこで液軆食餌となりますると今申した粥汁でありまするけれども、粥汁と云ふものは前に申して置いた通り、只の湯を食べると同じやうなもので身體の養生にならない、それで腸窒扶斯のやうな重い病氣に罹つて居る時分には身體が續きませぬから何か外に遣らなければならぬ、此時には此前に申したビーフテー、或は湯煎ソップ、或は牛乳が宜しい、若し牛乳が無かつた場合には此前に申しました甘扁桃乳、是は巴旦杏の仁で拵へた乳のやうなものです、それから玉子の蛋黄、是は流動軆であつて養いになつて至極宜しい、それから葡萄酒、斯う云ふ重い病人になりますると身體が衰弱するものですから、其衰弱を防ぐ爲めに此場合には葡萄酒を藥として遣ります、それが先づ液軆食餌てある、

其次は下利を止める方の食養生、腹の下る病人に與へる所の食餌である、腸加答兒とか其他總て腹の下りまする病人にはお粥が宜しい、此前にも申して置きましたが、お粥は下利を止める效能があつて至極宜しい、或は葛湯のやうなものも宜しい、或は犢の肉で拵へたソップ抔が宜しい、葡萄酒は下利を止める效能があるから酒としては葡萄酒が宜しい、それからビスケットのやうな類で乳を中に混ぜて燒いた菓子類は宜しい、是は下利する病人に遣る方の食物の獻立です、

今度は其反對で以て通じを付けやうと云ふ方の食料、是は平日通じの遠い人、若くは通じの止まる癖のありまする人は、斯う云ふ食物を平日用ゐるが宜しい、重に果物が宜しいのでありまするが、生の果物を食べるか、或は前申しました所の林檎酒のやうな

酒に拵へたものを食べるか、又牛乳でありまするならば、酸乳と云ふ少し酸味の掛りました——惡るく言へば腐敗した方でありまするが其酸味を帶びた所の乳を用ゐるか、それから甘い物では蜂蜜杯が通じの付く方の食物であります、平日食べて居る食物の中で、食べてから後とて腹の張りまするやうな物は宜しくない、去らばと言つて平日食べて居る所の食物の量を減ずると尚ほ通じが遠くなる、能く婦人方にあります通じの遠くなると云ふのは、全く食が細いとに原因するのでありますから、通じを付けやうとする場合には食を細くしたのでは可けませぬ、今申す通り腹の張るやうな物は無論宜しくないが、並の食事の外に通じを促すやうに、果物類を食たり或は水を呑んだり何かする、平日腹下しの種になるやうな物を食べるが却て通じは宜くなると云ふ譯てあります、

もう一つ二つてすから序に話して仕舞ひませう、今度は强壯食餌と云ふ食料てありまして、是は長い病氣て身體の弱つて居りまする病人を强くする方の食餌であります、長病で身體が弱つて瘦せて居りまするやうな人には此强壯食餌と云ふものをさせるのてあります、食べさせる物は大抵定まつて居りまするが、矢張り湯煎のソツプとか、或は雞卵だとか、或は燒いた肉でありまするとか、それから酒を用ゐまするならば、前に申したポート酒とかセリー酒とか麥酒だとか云ふものが宜しい、此節柄でありまするならば牡蠣でありまするとか、先づさう云ふやうな物が强壯食餌と云ふのてす、

其次は肥養食餌と云ふので、是は肥らせる爲めに用ゐる食料であります、肥らせるのには何でも脂氣の多い物を澤山食べさせるのが宜しい、其爲めに腸胃が毀れるやうでは可けませぬけれども、腸胃を毀さぬ範圍に止めて脂氣の多い物を食べさせる、此場合には牛酪も宜しいし豚の脂も宜しい、それから平日の食卓で使ひまするサラトオイルだとか、或は橄欖油だとか、或はクリーム杯も甘くて旨いものであり

ますからそれも宜しい、此肥養食餌を用ゐる場合と云ふものは随分に多いのであります、小供の瘰癧或は大人の肺病だとか云ふものは、長い間此肥養食餌と云ふものを、病人の厭きないやうに食べさせて置かなければならぬのでありますから、随分面倒てありますけれども、長い病人を看病する際には一番必要な食餌の法であります、無論此場合には麥酒や何かを食べると肥る、俗に酒を飲むと酒肥りになると云ふ位でありますから、酒を少しづゝ飲ませるのは差支ありませぬ、此場合は運動が丁度反對でありますから、肥るやうな肥養食餌をやつて居る間は、食ては寢、又食ふては寢して安臥する方が宜いのてあります、兼ねてマッサーヂ杯の按摩をさせて寢る方が宜しい、寢ると云つて唯だ運動をせずに横になつて居るのでは可けませぬ、眠ると云ふと其間に養ひになつて肥るのでありますから、眠るやうに仕掛けなければ可けませぬ、それだけが肥養食餌であります、

今度は今の反對て痩さする方の食事であります、醫者の方では減損食餌と言ひます、減損と云ふことは身體の目方を減じ損はせる、是は用ゐる場合が誠に少い、多くは肥つた病人に用ゐるのであります、痩せたいと云ふお方は試るのも宜いかも知れませぬが、人間は普通は肥て居るに増したことはないのであります、愈々病氣になつた者を痩させる爲めに食物を減らして遣るのであります、左もなければ此食餌は先づ必要はないのであります、前の肥養食餌の方は多くの場合に必要な食餌でありますけれども、減損食餌の方は之を用ゐる場合は至つて少い、其減損食餌と云ふものは之を受ける方の病人が餘程困難てあります、さて減損食餌の仕方は二通りも三通りもありますが、鳥渡見ると云ふと丸て反對の仕方をして居るやうに見えまするので、無論看病者が自分勝手に此食餌を食はせるのではない、醫者の命令を待つてみなければなりませぬ、醫者が二通りも三通りもある仕方の内どの方法を採るか知れませぬか

ら、醫者から減損食餌を命ぜられた場合には、能く醫者にどう云ふ心得で此病人には食物を遣つて宜しいかと云ふことを突留めて置て、さうして減損食餌の食物を獻立して病人を扱ふのが宜しいのであります、一躰此食餌の中で病人が迷惑をして頻りに苦情を云ひますのは、飲物を禁ぜられることである、食物を減ぜられた方は、病人は是も療治だと思ひますから幾らか諦めて醫者の命令を聽ますけれども、一切飲物を禁じて仕舞ふ、酒も可けない、茶も可けない、湯も可けないと、斯う云ふやうな工合に總ての飲物を禁じられて仕舞ふのが一番病人に苦情が多いのであります、何でも身體を肥やさうと云ふ時分には、今申した通り脂氣の多い物を食べるのと、食事をする時に飲物を多く飲みますと、身體が肥えて來ると云ふ說であります、又瘦させる方は丁度其反對て、食べる方は隨分食べても湯茶を減じて置けば身體が瘦せて來ると云ふ說がある、減損食餌は今の第二の方の說を實行するのでありますから、病人に取つては餘程困難な食養生であります、併し幸にして病人が迷惑を感ずる食餌を用ゆる場合は誠に少うございますから看病者も助かります、若し此減損食餌が廣く行はれますると、看病をする人は心を鬼のやうにして致しませぬと、之を仕遂げることが出來ないと云ふ結果になります、これで先づ九通りだけの食餌の類を終りました、丁度時間でありますから今日は是れて終ります、

（完）



醫學士　久保猪之吉

●爪を失ふ事あり。

前に申した、堅い靴を常に穿く人は、足の指、殊に小指の爪をなくなすのが常です、たとひ失ならなくとも、極發育がわるくなッて小さくなッて仕舞ひま

す。それは靴で押される爲に爪の營養がわるくなるからです。靴を永く用ゐた人の足を見ますと、小指の爪の形が滿足なのはありません。私等の爪は二ッにさけて居る。

又手の指の爪も色々の病氣で拔ける事がある。怪我をしても同じ事です。指が爪を失くせば甚だ見惡い計りで無く、非常に危險です。

●爪に疵の付くるも

病氣をすると爪に縱の筋が付く事がある。或は橫にスヂが這入る。此は爪が伸びると一所に伸びて、遂には失なるものですが、半年位は殘ッて居て、甚だ見惡いものである。或は之を呼て、病氣の筋といッて居る。又溝が出來る計りで無く、乾き切ッて、ボロ〳〵に脆くなる事がある。ソーなれば、爪は全くさけて剝げる事がある。コーいふのは何故出來るのか原因が能く分ッて居ない。しかし、營養の惡くなる爲に違ひ無い。ソレを拒ぐには原因をよく極めて之を避けるやうにする。若脆くなッてさけるやうなものは、外の刺擊をうけて非常にいたむ事や膿を持つ事があるから、成るべく傷をうけ無いやうに拒ぐ事が大切です。

●爪の伸び過ぎる時

足の爪の伸びたのは一番あぶないです。又爪の伸びやすいのは足のです。その譯は手はいつでも氣が付くが足の方は氣が付かない。又歩行く時物に躓く事がよくある。その時爪が伸びて居れば、引ッかけて、剝す事があります。殊に母たる人は子供の足の爪を注意しなければいけません。子供は足袋もはかずに下駄で駈け廻る習慣がある。或は木に轉び、或は石に躓く。その時親の不注意で爪の伸びて居ッたならば、その子は爪を折るか、爪をはがす。そして、血が出る、いたむ等いふ計りでは無い。時によると、おそろしい黴菌――その黴菌はあたり前の土の中にも、塵の中にも住んで居る…それが傷から、血の中へ這入ッて假令ば破傷風と申すやうな病氣を引き起します。こゝは母親の注意すべき所だろうとおも

ひます。

●爪磨粉

前の所で、昔の侍は殿樣の前に出る時、木賊て作ッた、板で、爪を奇麗に磨いて出た事をオ話したとおもひますが、爪を磨くといふ事は西洋にもある事です。西洋では粉を以て磨くのです。爪を磨けば、爪の背中の凸凹してをるか、筋が付いてをるか、又は爪の切り口の高低してをるのを平かに滑々とする事が、出來ます。時によると爪の切り方が粗末な爲めに、棘が出來てをり、それを知らずに他所の所をかき出しッて傷を作る事があります。こういふあぶない棘は、粉で磨くと奇麗にとれて、自分も危くなし、人にも失禮する事が無い。

磨粉として用ゐるものは

酸化亞鉛　三〇、〇「グラム」

カルミン　〇、五「グラム」

コーいふ比例に混ぜあはせたものがよい。先づ磨粉を板の片につけて。爪の上を磨くのです。唯注意を要するは、磨粉をあまり度々用ゐてならぬといふ事です。その理由は、爪が漸々薄くなッて、ソーなれば衛生の主旨に背く譯です。

●爪の掃除の時、

爪の掃除が大切だといッて三百六十五日毎日毎日十指廿指、(即ち手と足と)の爪を一本ッつ掃除して居ッては仕事の邪魔になる。ソーなると捨ておく方が後るやうですから、爪を磨いたり、剪んだりするには、一定の時を設くるがよい。ソコで爪を切るのは十四日目毎に切るが普通です。しかし、外科醫者等のやうな職業では、手術の度毎に氣を付けなければなりません。爪の下の垢ですが、コレは、湯に入ッた後には必ず、除けて、石鹼を塗り「ブラッシ」で、ー磨くやうにしたいものです。倘爪をつむのも、湯上りの時が一番です。

●爪の話はオ仕舞、

諸嬢、爪のオ話はアマリ長くなッてオ倦きになりましたらう。ソレでは昔の人が「二月三月日遲々」き

さらぎ、やよひ、ひ、うら〳〵と申した、春の時節も近いた。櫻も笑ひ、鳥も歌ひ、人々皆、化裝してさわぐ時節が近いたのですから、次の欄には顏の色の話をいたしましやう。皮膚の事をオ話いたしましやう。ソレによッて諸孃は、皮膚といふものは、ドーいふ風に組立てられてをるものか、又ドーして顏の色がくろかッたり、赤かッたり、白かッたりするものか。又ドーしたならば、皮膚を丈夫にする事が出來るか、又ドーしたならば美しい皮膚をもッ事が出來るか、それらの事をオ話致しましやう。

●姿見。

越後の松山鏡の昔話は、名高いものです。皆サン御存知でしやう。鏡を姿見と申したのはよくいッたものです。御婦人の方は鏡といへば、先ッ御自分の顏は、ドーであらふ。美いか、醜いか、圓いか、長いか、といふ感じが、直ぐと浮ぶでありましやう。與謝野晶子サン（その頃は鳳サンでした）の歌にコーいふのがありました。

湯あがりの身じまひ成りて姿見に
　笑みし昔の無きにもあらず。

ゴ婦人の身になッたら眞にさようでしやう。

昔、小野の小町が
　面影のかはらで年の積れかし
　　假令命にかぎりありとも。

といふ歌をよんだといふ話ですが、美人がその顏かたちの、長へならせと祈るのは千古變らず。又美を望むのは、人として自然の事です。ましてゴ婦人に於きましては。

●鏡を捨てた話、

鏡に向ッて、醜い顏を見れば、ツク〳〵イヤになる。コヽニ面白い話がある。皆サンゴ存知の徒然草――ツレ〳〵草の中に書いてあるのを言文一致に直してみればコーです。京都高倉院の法華堂に何の律師といふ坊サンが住んでをりました。或時此坊サンが鏡を取ッて自分の顏をツク〳〵眺めた。ところが、自分の顏があまり醜い、きたないのに、あきれはてて、

それから後といふものは、鏡が惡くなり、又こわくなッて、一生、手に取ッた事が無かッたといふ事です。此話は、泣く子が鏡に映ッた顔を見て、ヨケイ泣くと同じやうな幼稚な話ですが、美しいのを好み、きたないのをいやがるといふのは、昔も今も變りはありません。

●顔　色。

西洋のやうに裸体畫を、稱用しない日本のやうな國ては、美しい、醜いを極めるのは顔に在りてす。顔の形は生れ付きてすからやむをえません。長い顔を圓くする譯にもいかない又、張ッた頬骨を削る譯にも參りません。唯色艶だけは、ドーかなる。又顔の美い中て、最も勢力のあるのは色てす。ですから、昔からの諺にも、色の白いのは百難をかくすといふ事があります。又容貌の奇麗なのを容色、美なりともいひ、花の顔月の眉等といッて居ます。白樂天といふ詩人が、有名な、長恨歌といふ長い詩を作ッて居る。それは楊貴妃といふ美人の事を主にして作ッたものてすが、中に、

三千後宮無二顔色一

とあります。楊貴妃一人が寵愛をほしいまゝにして他の三千人もあッた美人たちは顔色が無かッたといふ形容です。顔の奇麗といふ中て一番必要なのは色です。

●おしろい。

顔の色の黒いのを貴ぶ黒人種は知らない事、地球の上に住む人間は誰しも色の白からむ事を願ひます。吾々日本人、支那人等は世界地理の中て黄色人種に數へられて居る。けれども、黄いな色をした人を美人とはいはぬ、少し赤みがかッた白い花のやうな、玉のやうな顔の色を極上といたします。誰しも、殊にゴ婦人がたに於ては、その願ひが一層ツヨイてありましやう。ですから、湯に入ッて上ッた後はおしろいを塗り、紅をさす。おしろいは顔の色を白く見せやうとおもふ爲、口紅は口唇の紅をして一層鮮ならしめむ爲てありましやう。おしろいは鉛が入ッ

て毒です。それにもかゝはらず、おしろいの止められないのは顔が見違ふやうに奇麗に見えるからです。女の方は、湯に入ッてオ化粧をして歸ると二ッ位は若く見えるものです。又西洋等では、色を白くする爲に、砒素を食べる——砒素といふのは毒物で、身躰にわるい。昔、那須野が原の殺生石等いッて鳥がとまれば、死ぬといッた石も此砒素を含むで居るてといふ話です。ソーいふ毒な物をのんて居る貴婦人もあるそうです。西洋ても日本ても變らない。（未完）



應急所置

醫學士　米山彥郎

疝痛の起こりし時。

卒然に周圍の人を驚かし、しかも其處置に迷はしめるのは夜間などに急に疝痛とて劇甚の腹痛を起こした場合が最も多い。それ故かゝる急場の處置一法は通俗の方からも心得ておいていたゞきたい。

此痛みは時によりて同時に嘔吐を伴ひ、全身には冷やかなる汗を浮べ又虚脫を起こす事があります、且つ此疝痛は其特性として時々痛みが歇み又一定の時間をおきて再發するものです。

此際には如何なる源因により起こりしものにても宜しく溫たかき臥床に就かしめ、下腹部には溫器法を施こし、飲料として赤酒を混ぜたる熱き茶を與へらるべし。種々の源因の内より其一つを定め之に向かいて適切の治療を施こし得るは良醫を俟つより道はありませぬ。

尿の停溜せし時。

健者と病者となく二十時間以上も尿利のあらぬ場合には、何か身躰に故障の生ぜし徵候なれは速やかに醫師の診察を受けらるべし。



質疑欄

●●●●質問注意　質問中診察せざれば應答し難きものは答解の限りにあらず又答辨に遲速あるは登載順に都合ある爲めと御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみなわかりよく認むる事●質問に姓名を出すことを好まさる方は匿名にても差支なし●本號の雜誌に登載する分は凡前月十五日迄に申込まれしものとす

▲尙御質問の際は男女の性、年齢及簡單の經過御記入ありたし

質問者　九洲の一少婦

▲問　寒くなりましてからはとくよりつねに足袋をはいて居りましてもしもやけを致し手足ともに潰亂せんとして實にこまり居りますが此のしもやけは生理上如何なる理由なるかまた手安き藥敎え下さい

答解者　醫學士　米山彥郎

●答　凍傷の事は前號の衛生時事の欄内て久保學士より委しく御話があつた樣ですか。通例凍傷にかゝる部分は常に外氣に曝されておる耳、鼻、手及足などあります。此等の箇所は被服の外にあるのみならず、心臓から最も遠さかつた所で、血液循環の關係からいふと他の躰部よりは不利益の位置てありますから、寒冷の爲めに循環不良になり其結果が霜燒となるのてす。
尤も凍傷を來たす寒冷の度は各人一樣てはないのてつまり循環器に障害のある人、營養不良の虚弱の人又は貧血の人は少しの寒さても容易にかゝりやすい。又一旦凍傷すると數年間引續きて再發する傾きがあります。
以上の道理から、凍傷を豫防するには。先つ身体を强壯にして血液循環を盛んにし寒中ても手足の溫かておる樣にするのが大切です、次には適當な衣服を纏ひ又は職業をかへて可成寒氣に觸れぬ樣に心掛けねはなりませぬ、又手足の凍へた時に

急に火に當たるとか、洗物をして冷えた手を急に熱湯の中へ入れてあたゝめる如き凡て激度の温度にあふ事はよろしくない、冷えた手を温むるには先以て摩擦し幾分か温たかとなつた所て追々に火にあてるといふ様にしなければなりません。其外素因のある人は温暖の時に冷水浴及ひ冷水摩擦をなして手足の皮膚を強固になしおくとか頗る有効な豫防法てす。

既に凍傷にかゝつた場合には、色々の療法かありますが先つ簡單な法は、アルコホールを布にしたし藍赤色となつた部分を充分に摩擦し其後に次の膏藥を塗りつける。

樟腦油	一、〇
ラノリン	九、〇

右外用

或は一日二回位づゝ次の混合物を塗布するのも宜ろしい。

沃度丁幾	一、〇
コロヂーム	一〇、〇

最早皮がむけてたゞれる樣になつては俗人て治療するとは六ケ敷から專門家に托せられた方か得策てす。

質問者　地方の一女子

▲問　私は今頃になりますと腰より以下殊に足の先が冷えまして夜は床につきましても足の温まらぬ爲めによくねむる事が出來ません其上夜分足がつまりましてはげしきいたみを覺へまた關節の處が時々痛みをおぼえます殊に足の先きは少し寒くなりかけますと冷えまして年にも似ずと人より屢々笑はれますけれとも私に取りて困り升如何なる理由か又良法御教え下されたく候

●答　夜分脚部の冷へらるゝのも時々關節の痛まるゝのも共に血液循環不良の結果てあるから適當の養生と運動とにより健康を増され血の循環を盛んにする樣に御忠告申します。

▲問　肋間神經痛と申しますはさのみ心配の病にてござりますまいか此頃にては毎日の樣に痛みがありまして、呼吸にこまりますから如何のものか御教え願上候

質問者　佐賀の一會員

●答　肋間神經痛と申すと脊柱の所から肋骨に沿ふて前胸の方に時々疼痛か起てるもので、特に運動、深呼吸、咳嗽などの時に著るしいものです。此痛みは往々肋膜炎の痛、胸筋の僂麻質私などと間違へるとか往々ありますから注意せねければなりませぬ。

且つ此病氣か感冒、麻拉利亞などの結果てきたものなれは相當の治療て治癒致しますが脊柱脊髓の病氣の爲めに起てりしものなれは容易ならぬものてあるから早速醫療を受けらるゝかよろしい。療法は專門にわたりますから御話し致しませぬが兎に角冷ゆる事は宜しくない。

▲問　よく人々手淫の害を申されますが手淫とは如何なる事に候や又手淫の豫防法及矯正法詳しく御教え願上申候

質問者　京都一會員

▲編輯者曰く右のに略々同じき問ひは嘗て（關東一會員）より質問せられしが左の答に就て御承知あれ

●答　人長して十七八天賦の奇妙なる異性相愛するの情が起てるのてある、此時期を春機發動の期と稱へて此時に生殖器は發育するのてあるが、此際に情感の發動するや情慾奔逸の結果やゝもすると其犧牲となつて、造化の本旨にそむき天然に違反した種々の方法て情感の滿足を求むるとゝなる之れか所謂手淫鷄姦なとの忌まはしき風習をなす所以てある。此惡弊か獨り男性のみならす女性にもあるに至つては沙汰の限りといふべきてある。

此惡習を矯正するとは抑も六ケ敷い、といふのは事柄か私行秘密に屬くするのみならず强ひて父兄

監督者の中より警戒を試むるは反て此惡習を敎へ誘惑の動機ともなる恐れかある、故に各人の智德の發達によつて自から生殖の何物たると又其濫用の弊害とを自得自解せしめ自から謹愼ならしむるより方法はないと思はれる。

そこて其弊害といふのは、身躰發育充分ならさる時に生殖器を用ゐる時には身躰各部の發育を妨け精神作用を鈍くし、其結果は貧血を致し顏面蒼白となり腦力の發達を妨け、記憶力を欠乏し、心身共に虛弱となり終に成業を誤まるとかある、加之成人の後に至り眞の生殖機能を全ふすると能はさる悲境に陷るものか往々あるので其弊や甚たしいものと謂はねはならぬ。

質問者　會　員　某

▲問。私は姙娠四ヶ月に御座候處日頃老人どもの話によれば姙娠中火事を見る時は胎兒に赤きあざを生ずと聞居り申候然るに此程近き處に火事有之申候まゝなるたけ見ぬ樣に致し候へども近火の事とてつい〳〵目に入り申候かゝる爲に赤あざは生ずるものに候哉必ずあるまじき事とは存候へども日頃より神經のつよき性質とてあんじられ候まゝ何卒御敎示被下度伏して願上候

●答。此等か所謂迷信と申すもので毛頭さる事實はありませぬから御安心なさい。母の精神作用は胎兒の發育上大に關係するものでありますから、姙娠中心の修養を旨とせられ、さる迷信に陷らず心氣を淸らかにせらるゝは親として子に對する第一の義務と思ひます。

質問者　中仙道會員某

▲問。月經時に用ゐるに如何なる物を用ゐ候はゞ健康に害なきや其使用品何卒御敎示下され度願ひ上候

●答。月經は何時ぞやも申上けた如く、子宮の內壁を被ふ粘膜の空管が充血し夫れか破ふれて出血す

るのでありますから、手足の傷と同樣て不潔物がつくと膿をもつ恐れがある。夫故に最も衛生的には消毒したるガーゼ、脫脂綿等を用ゐらるゝか又やむなく紙なれば少なくとも純白の淸淨なものを用ゐられねばなりませぬ、決して古き襤褸淺草紙の如き粗末な不淨のものを用ゐられてはなりませぬ。又申上くる迄もなく局部に觸るゝ手は充分に洗ひ爪の掃除を怠たられない樣に願いたい。

質問者　越後會員

▲問。私事五六ヶ月前より月經中下腹痛み誠に困り居り候が如何なる故にや何ぞ冝き療法もこれあり候はゝ何卒御敎示のほど願ひ申候

●答。平素殊に月經時には便通を規則正しくして可成便秘を避け且つ腰部を溫罨法にて溫められ運動はさけらるゝがよい。

質問者　東京會員某

▲問。私妹義（廿七歲未婚者）昨年八月頃より曾て覺えざる下りもの致し候色少しく青白色を帶びたる臭氣ある粘液にて小量ながらも堪へず漏洩いたしをり誠に心地あしく候由每々醫師の診察を受くべき樣進め候へとも今日まで等閑に打すぎ居申候尤も氣分などは少しも障りなきよしに候何とか衛生治療の法はなきものにや御一診の上ならては叶ふまじくやよき藥石もあらば御敎示被下度願上候

●答。世間往々人の前て私は子宮病に惱んでおりますなどゝ口外し恬として耻ちない人かあるが、實は御婦人にとりては忌まはしき子宮內膜炎と申す疾患にかゝられておらるゝ樣ですから、御自分て姑息的の手當をなさるよりは一日も早く良醫の手にかゝり、病の慢性とならぬ間に療治せらるゝ樣御勸めします。

質問者　越後某婦人

▲問一、腸胃を健康にするには如何なる養生法及

ひ如何なる薬品を用ゐて宜しきや

▲二、子宮を無病健康にするには如何なる攝生法を用ゐてよろしきや逐一御教示願上候

●答。胃腸を健全にする養生法との御尋ねですか。別段新法奇術のある理ではありませぬが、其法ともいふべきは要するに胃腸の自然の作用を妨げない様にするてある。

夫故に先つ第一には日々の飲食物の分量性質時間等に注意し、毎食事の時間を正しくし、飽食もせず、空腹にもならず、可成間食は避け、食物の温度寒熱に偏せざる様に注意する。第二には攝取した食物のよく消化し吸收せらるゝ様にするのてある。即ち食物が口腔に入りし時はよく咀嚼して充分に唾液に混せしめ、適當の運動によりて血液循環を盛にし従ひて胃の消化力、腸の吸收力を強めるのてある。

此等のとは誰人も知悉せらるゝ所てあるが之れが唯一の養生法て唯良く實行せるとの難い所が養生の養生たる所以てあります。

俗人の方は養生といふと何か結構な薬品でもある様に思はれますか、薬品は身体の機能に保障のありし時にのみ用ゐらるゝもので健康の身体には決して必要がありませぬ。

●二問答。子宮も胃腸と同様て濫用するとはよろしくない、月經時には特更注意して不衞生をなさらぬ様にされ又便通を規則正しくし子宮の近邊の血行が不順にならぬ様に注意さらるゝが肝要です。

質問者　信濃一會員

▲問。私の娘は當年五才になりますが昨年三月麻疹にかゝり、其當時顔面より頸部軀幹といふ順序に暗赤きものが一面に出來まして、一時四十度近くの發熱がありましたが四五日の後には平温に復くし細かき腫物も段々消失し二週間程て全く快復しました。然るに此頃再び顔が麻疹の時の様に紅くなり熱をもつて痒ゆがります、

併し此度は輕度と申し發熱も著しくはありませぬ。昔から麻疹には一回かゝれば再發はせぬ樣にきゝ及びておりますが果して左樣でありましようか、若し此度の娘の病氣が麻疹でなければ何であるか御手數ながら御說明の程願上ます。

●答。麻疹の傳染力は大變强よいもので何人でも多くは幼時に一回罹かる、併し奇躰な事に一回此病氣を經過すると再三犯されるといふ事はない、併し之れは普通の話して稀れには二回或は極稀には三回かゝつたといふ例がありますから必らず一回のみのものとは定まつておりませぬ。だが唯顏に細かきものが出來たのみでは何時でも麻疹といふ事は出來ませぬ麻疹は一種の流行病でありますから此にかゝつた場合には大槪近邊に同じ病氣にかゝつておる小供があります又發疹する前には多少にかゝわらず結膜炎鼻加答兒氣管支カタル等がありまして淚を流し、鼻流甚しく、咳嗽があつて發熱し次きて發疹するもので其發疹は通例顏から初まり胸の方へ廣がるものです。以上の點から御察し申す處此度の御娘子の病氣は恐らく麻疹ではなくて

漆の中毒

かと思はれます。元來此漆の中の毒成分は揮發性ものでありますから、充分乾燥した漆器に觸るゝも差支へありませぬか猶新らしき臭のある漆器例へば新らしき膳部一閑張など、若しくは花を帶ぶる漆樹に近づく時は感じ易き人は容易に此病氣にかゝります其症狀は先づ顏が熱くなり且つ瘙痒を覺え一面に紅き斑が出來て多少發熱することがあります。

此中毒は數日の後には別段治療をせずとも自然に皮が剝げて消え去りますが餘り瘙痒がる時には五十倍稀の安母尼亞酒精を筆にて塗りやれば清凉に感じます。

大家談片

●此欄は大家の談話の秘萃したものでありますから其談話者の姓名を掲げるもあり掲げぬもあり升其御つもりて

▲脚氣病のこと　三浦博士が昨年の夏歐洲へ渡航されました歸路脚氣病研究の爲めシンガホールを出發して瓜哇島のバタブヤに上陸して同地の病院を視察されましたことを聞きますに同病院は脚氣患者の轉地療養所でありまして其患者は土人（馬來人）と支那人七百名余りて其内四百名計りは皆脚氣患者で白人は一人もありませんそして土人の食べ物は何にかと申ますと矢張り米食で副食物は野菜魚類などを常食として居ります脚氣の原因が食物の中毒症だと申すことは博士の嘗て發表されました意見でありますが初めは此の説に對して駁撃するものも多くありましたが今日では一般に異論のないようです海軍が糧食の改良をしまして脚氣患者を減じたのを見ましても其説の確かなことがわかりますから皆樣脚氣持ちの御方は天の未だ雨ふらざるに牖戸を綢繆すると申す用意は今より緊要でありますから其御積りで麥飯を多く採用する習慣を御付け遊ばせ！

▲風邪の注意　風邪は大分近頃流行しますが一躰風を引くと申すのは前に身躰を暖かにして居ッて急に寒さ風に當る時に風邪を引くのであり升（障子の障間風は極く惡るい）併し入浴して身躰が海老の様に赤くなッて居る場合には皮膚の收縮力が痲痺して居りますから幾分か無感覺の氣味で風邪を引くことは少ないようてす寒氣を防ぐ爲めに衣服を多く着るのもよしあして餘り澤山に着ると少し歩行きてもすると汗が出る其汗が冷かな風に吹かれると皮膚と衣服の間て冷たくなる爲めに尚ほ早く風邪を引くやうな事になりますから衣服を餘り多く着る事も能く考へねばなりません併し身躰を冷やしては體溫が減ッ

て全躰の病氣に對する抵抗力が乏しくなるから爲めに意外の病氣を引き起すことが度々ありますソレてありますからナンでも人は寒氣に負けぬ樣抵抗力をつよくするのがよいので之を強くするには暖き季候の時より初めて冷水て身躰をふくか水を浴びるかして一の習慣を作るのがよい詳しくは久保學士の時事欄に前に出てゝ居りましたから省き升

▲節食の誤解　此談片は三浦博士の說かれたるものなり食物は何でも多く喰べる程善いのですが、俄かに餘計喰ると、勢ひ胃を惡くする樣になりますから、小兒の中から餘計喰べさせて、多食に慣れるやうにしなくつては可けません。昔は食を節すると云ふ事を誤解して、少なく喰べた方が長命でもする樣に思つて居りましたが、是は大變な間違ひてす、一寸した話にも、昔或る大名の料理人に、大さう長命て達者な者がありましたから、殿樣が目通りへ呼び出して、養生法を聞くと、其者の云ふには、別に養生法もありませんが、私は料理番だから、鳥類を料理する時、氣を付けて見ると、鴨や家鴨は胃袋が張裂る程食物を詰め込んで居りますが、千年の壽命を保つと云ふ鶴に限つて、胃袋の中には食物が澤山ありません、其故私は鶴の眞似をして、食物を控へ目に致して居るので、斯う長生をしますと答へたなどゝ下らない理屈を附て、成程と感心した事は、昔の子供騙し、大方食物を惜がる吝嗇坊が作つた話でありませう。鳥でも獸でも、動物は大抵秋から冬に懸けて、食物を多く食べて、脂肪を澤山に殖し、それて寒氣を防ぐやうに、自然出來て居ります。人て云へば綿入を着た上に、外套を着るやうなもので、冷氣を身躰に導く事が少くなつて居ります。

▲大食と小食との利害　鳥獸は斯う自然で巧く往くやうに出來て居りますが、人間は自分が努めて秋から冬に掛け、多く喰べる樣にしなければなりません。食物の分量は多少に限らず、習慣になれば、胃の大さが極つて了ひます、乃て小食の人が三杯喰ふも、大食の人が五杯喰ふも、滿腹の程度は同じして、身躰

の營養上にも相違が無いと云ふ人がありますが、是れは間違つた考へて、一家の經濟に譬へて見れば一ヶ月百圓の收入がある人は、五十圓の收入の人に比較すれば、一躰に大きく立派に遣つて往けます、尤も收入が多ければ、支出も隨つて多いから、差引勘定すれば同じだと云ひますが、一家の經濟でも一身の營養ても、大きければ大きいだけに、外來の刺戟に對する抵抗力が強い道理てす。又躰内の脂肪を殖やすには、蕎麥とか麵麭とか云ふ、澱粉の多いものが良いのてすが、食物の種類を撰む杯は抑も末の事て、何でも澤山喰べるのが宜しい、殊に冬は大食に限ります。

▲住所の心得　冬の住所は十分に暖めて置く事が必要ですが、どうも日本の家屋は不都合な構造て、室内を一躰に暖める事が出來ません、其故勢ひ炬燵に潜り込むやら、火鉢を抱え込むやら、する様になるのてす。此の點に至りますと朝鮮杯は野蠻だの何のと馬鹿にされますが、床下から室内を暖める工夫になつて、感心なものてす。其代り温々暖る心持が餘り好過るので、怠惰者が多いと云ふ事であります。兎に角適度に室内を暖める事は必要て、隙間から風の吹込むのも、十分注意して防がなければなりません。西洋人は隙間の風と跣足と、頭を太陽に照り付けられるのと、此三つは大禁物にして居ります。

▲衛生の誤解　世間の人が衛生と云ふことを誤解して、唯身躰を玻璃の道具見たいな、毀れ易い物でも取扱ふやうに、大切に〳〵とばかり云つて、其實大切にする方法を誤つて居ります。飽くまで働くべき身躰を持つて居ながら、眞綿へ包んて桐の二重箱へても藏つて置くやうな考へては可ません。種々の病氣に對して、抵抗力を強める事が肝心ですから、其心得て平生身躰を鍛へて、不意に病氣に恐れないやうにすべきものてす。衛生の中でも、食物には特に誤解が多い、肺病患者杯は何れも小食の者に出來易いから、胃腸て消化し得る程度までは、成るべく大食が好い、併し其程度を踰えて暴食になつては可

けませんと云々。



衞生時事

醫學士　久保猪之吉

●寒暖計

皆サンは寒暖計の作り方や、見かたは御存知てしやうから、述べませんが、家の内に無くてならぬものてあるといふ事をオ話ししやうとおもひます。前にもオ話した通り、人間のからだは、寒さ暑さが急にかはれば風邪を引きます。必ず寒い時ばかりて無く、暑くッても涼しくッても風邪にとりつかれる。夏など寒冷といふことがあります、即ち急に温度が下ッて來るからてす。ソレてすから、室の内の温度をあまり變らせずに平均させて行くといふのは甚だ必用なことてす。それには寒暖計が無くてはならない。西洋ては、「ストーブ」をよく用ゐますが、寒ければ、「ストーブ」に火を加へ、暑ければ又涼しくするといふ事は寒暖計で分るのです。

●室内の温度

室内の温度は急にかはッていけないならば、何度位にしておけば一番よいか、コレは殊に病人を預ッてをる室て必用なのです、弱ッてをる身體には、少しの温度の差があッても感じやすい。併し、勉强室等はあまり熱くすると、のぼせて眠くなります。てすからいつても同じやうな温度にしておく事が大切てす。その割合は凡そ次のやうてす。

住室　十五度――十七度

病室　十七度――二十度

凡そ、此位の見當て、注意する事が必用てす。靜にしてをる時は運動する時と違ッて少しの温度の差にても感じやすいものてす」

譯の分らない小使や、女中などに任せきりにしておきますと、石炭を燒く時はドシ〲燒きて室の温度を九十度百度に昇らしめ、汗が尿れて熱い爲めに窓

を開き、着物をぬぐといふ始末になる。注意して寒暖計を見てをると、みる〲十度二十度と下つて行く。暫らくして火が消えて仕舞ひ、温度は十度以下に迄降るといふ事がある。かやうなのは、最も恐るべき温度で風邪ひき受合です。ですから火は少しづゝ、時々加へて行く事が第一です」

●西洋人と寒暖計と

日本人は室内に寒暖計を吊しておいても、病院のやうな所をのぞけば、多くは飾りもの同様です。しかるに西洋人が寒暖計を注意して見る事はおどろいたものです。皆サン御存知の、櫻井醫學士が今は獨乙の「フライブルヒ」といふ所にをられますが、先月手紙をおこしていふのには、「獨乙はホントーに寒い、しかし室の内に勉强してをれば、寒さをしらない。ソシテ大抵の家では寒暖計を二ツ使ッてをる。その一つは室の内に吊しておく事日本の如く、一つは室の外に吊して、室の内と外との温度を比格するのです。又常地へ來て一番ヤラレタのは湯へ呼ばれた時です。宿の老媼のいふには、湯が出來たから御はいりなさい。しかし、あなたは何度のオ湯ニオはいりですかと問はれた時は誠に恥ち入ッた云々」と書いてありました。コレに由ッて見ると老人でも既に寒暖計的の頭脳をもッてをると見えますシテ見ると西洋と一世紀の差いは少くとも在るかとおもはれます。』

中外彙報

▲目黒の癩病院　熊本の癩病院のことは前號に記載しましたが尚ほ東京市内目黒にも外國宣教師の設立に係る慰廢園と云ふ同様の病院がありまして目下四十餘名の癩病人が入院して居ります醫療は北里博士が慈善の趣意により一切無報酬で盡力中です而して又一方には基督教の感化をもつて心靈上に安心を與へ世にも人にも捨てられたる不幸の病人を救濟する組織でありますから隨て入園者も追々増して來ましたから是迄は一切海外よりの寄附

に依賴して居りましたが今後は大に日本人の義捐を仰きてます〳〵其設備を擴張する準備中だと申しますが我國の人は兎角惡疾を嫌ふのみて之を救濟する爲めに西洋人士の如く同情を盡すことの少ないのは一つは宗教上の關係もありましやうが日本人の惡疾を他國の者に救濟して貰ふとはまことに辱しきことではありませんかドーカ是等の救濟院は政府なり團躰なりて設備したいものです皆さん何んとお思ひてすか

倘ほ同園に患者を入園せしめたきもの又は金品を寄附したい方は荏原郡下目黒なる園長大塚氏もしくは築地新榮町五丁目五番地篠原氏に就きて詳細の報知を得らるべしとのことてす

▲奇特なる看護婦　先達て東京瓦斯紡績會社工女數名がペストに侵され本所病院に入院しましたとき醫員や看護婦の懇篤てあッたと申すことは人々の知る處てすが患者松原千代野(十六)に付添へる看護婦宮部たつといふ人は其の看護の懇切なるは言ふ迄もなく同女が淋巴腺を抉り取りたる後の癒殘りの爲め院内にて徒然に苦しむを見て宮部は敎育に志ざしあるものとて隙〳〵にいろは假はアイウエオより敎へ込み退院の節には假名付きの新聞紙位はよみ得る樣になせしとのことてすが病を助け綳帶を施すさへも五月蠅しと眉を顰むる看護婦の多き世中に而かも恐るべきペスト患者に接し斯る懇篤なる行ひありしとはさても奇特の事てはありませんか

▲兒童の恐怖心　米國のマサチユセットの或兒童研究者が九百六十余名の兒童を調査して得たる統計の大要は左の如くてすと

動物恐怖者	犬	男二百六名	女二百三十七名
	蛇	男百四十二名	女百五十五名
人類恐怖者	乞食	男四十五名	女七十九名
	巡査	男二十三名	女三十名
自然恐怖者	水	男四十六名	女三十七名
	暗黒	男百八名	女百八十八名
器械恐怖者	火器	男五十八名	
超自然恐怖者	幽靈及怪異	男廿七名	女廿七名

▲赤十字社總裁宮　日本赤十字社にては小松宮彰仁

親王殿下薨去につき其御後継として閑院宮載仁親王殿下を奉戴せんと上申中の處去る二日御承認あらせられたりと承る

▲博覧會の救急治療所　大坂私立衛生會の設備にて去る一日より場内東北の片隅にて開所したとのことと所長は清野勇氏常務委員一部二部に分ち醫員五名調劑師二名看護婦は同市なる各看護婦會員交代にて勤務などの事ですソコで序に博覧會見物の費用を一寸と次さに記しましやう

▲博覧會見物の費用　博覧會見物に就ては何程位の費用を要すべきか、之れ來觀者の第一に知らんと欲する處なるべし、此頃大阪新報記者は其紙上に於て下の如く計算したるが頗る面白き書方なるを以て其儘左に轉載せり

先づ一通り博覧會を觀るだけの費用を雜と記さんに。本館の入場料は五錢（日曜は拾錢）不思議館は卅錢（但しカーメンセラの電氣舞踏、小兒化育器、天色寫眞、無線電信、X光線など二十六種を三分し一部を觀んとする者は十錢宛）餘興動物園、薩摩踊、人類館（七ヶ國の人種が生活する狀を觀するもの）は何れも十錢、ウオターシユート（即ち茶臼山下の滑走船）は廿錢之だけで雜と九十錢費るに、歩く許りては足が勞れるから茶店へも寄ねばならぬが、同じ寄るなら國への土産話と喫茶店へ入り紫袴を穿た美しい姉さんが汲て出す薄茶に咽喉を鳴すとなると代が十錢、夫から金の茶釜とは奈何物だんべいと一寸と覗かうとなら見料が二錢、序に丹醋倶樂部へ入って龍踊り虎嘯く狀を眺め、月落烏の唐詩も扇へ書て貰はんとならば又十錢を要するなり、尤も茶を飲だゝめ便所へ行くとすると上等が八錢、中等が五錢、其上晝飯を倶樂部と洒落れば、三皿にビール、平野水附て五十錢天狗樓とてもするものなら五十錢以下二十錢、十五錢、お好みに依ては二錢で小豆飯に香物の添へたるを出す相だ。猶ほ堺の水族館へ行うとなら、入場料三錢（日曜は六錢）難波停車場より

汽車賃が往復二十四錢、堺の停車場から大濱往復の車代が十三錢、總計二圓內外費る所へ案內記に十錢奢り紀念葉書に一錢五厘張込み、天王寺まで關西の構內引込み線に乘るとすれば二錢奮發せねばならぬし、津の勢の岩おこし小倉屋の髮附の一本も買へば宿料などを別にして尠くも二圓四五十錢の金がなければならぬゆゑ地方の人はその積りて鬱金の胴卷へ臍繰を詰込み來るが宜しからん云々

見物の費用といふは大抵之にて算當が立つべし、ソコデ宿料は東區旅宿業組合に於て先日決定したる處は一泊並等八十錢より上等一圓五十錢迄を數等に區分したるものにて先づ何處へ泊つても此位の相場と思へば間違なかるべし（但しモソット上等お望みならば何んな處でもあるし又ズント安い處も無いてはない）此外は車代位なるが之は近いと遠いとて相場も違へば又掛合樣にもよる事故臨機乘ると乘らぬは御勝手に任すべしとのとてす

▲東京市の施療病院　過般理事の提出してありました原案は大久保に設立し總坪千四百四十餘坪にて十三万三千六百餘圓なりしを委員は敷地を廣村とし建坪百五十餘坪を減じ總額を十二万三千餘圓として市參會に提出したとの事です

▲東京市の死亡者と火葬　昨年十二月一日より同年十一月末迄の東京市内の死亡總數は約四萬人て其內四割は小兒にて又統計上大人死亡の原因の三割は脚氣にて肺病之に次ぎしとの事各火葬場にて取扱ひたる總數は二万三千餘名にて土葬の分は死亡全數の三分の一に及ばずと

▲ペスト患者退院と病院の閉鎖　豫て本所病院に入院中なる患者加藤乃世相原小林の三人は最早全快せしより去る七日退院して紡績會社に歸り又同病院は去る九日より閉鎖せしとのこと

▲虎列剌病毒の殘毒　客年コレラ病の猖獗を極めたる九州地方には客年の病毒依然として殘存潜伏し現に福岡市及び佐賀唐津の如き本年に至り殘毒を

發見したりと本年は世界的博覧會の開設にも方り居れば一朝コレラの流行を見んには實に容易ならぬことですから此際各人の一層注意されたきものです

▲横濱に天然痘　朝鮮人高徳天は妻及三人の子供を連れ横濱に上陸某旅店に宿泊せしに其三男天然痘にかゝれりと目下朝鮮國は天然痘の流行地となり居れりとの事です

▲東北地方の破瓜期　初經の年齢即ち破瓜期は身體の發達、營養の度、生活の狀態、氣候風土の關係、文野の如何、敎育の程度に大關係を有するもので獨逸の女子は十五歳のもの最も多く印度は極めて早く十二三歳にして初經を見我國の女子は醫科大學にて調査したる平均年齢は十四年八ヶ月にして滿十三歳より十五歳の三ヶ年間に多く其比例は百分の七十二です東北醫學會の某氏が東北地方の女子の破瓜時期を取調べしに左の如しと

宮城縣の女子	十五年一箇月十一日
福島縣の女子	十五年○箇月十三日
岩手縣の女子	十五年二箇月十六日
青森縣の女子	十五年十箇月廿五日
秋田縣の女子	十四年十箇月九日
山形縣の女子	十四年十一箇月八日
平均の年齢	十五年○箇月八日

此調査に依れば全國平均の破瓜期女子年齢十四年八箇月に比して東北地方の女子は四箇月乃至五箇月後れて居ります是れ氣候及び文野敎育の程度に關係するものでありませう

▲雜報　目下實扶垤利亞新患者は毎日五六名を下ることなし本年一月一日以來三月五日迄に百七十九名に達せりと▲猩紅熱及痲疹も近頃流行の兆あり▲臺灣のペストは一月以後既に百數十名に達し死亡者少からず蔓延の傾きありと▲全國醫會の大會は來二十九、三十日の兩日京都なる京都倶樂部に開き發起人北里博士外百二十餘名の署名を以て夫れ〳〵檄を飛ばしたりと▲ドクトル渡邊準哉氏は今回山根正次氏外二三の熱心なる贊成を得て資本金三十萬圓の株式組織として共同大病院設立の計畫ありといふ▲衞生

學の創立者なる獨逸のマックス　フォンペッテンコーフェル氏の功積を不朽に傳へん爲め同地に一大紀念碑を設立せんとて本邦有志者の加入を申越せりと

●會告　食物調理法の欄は適當の記者撰定中休揭仕候



大日本婦人衛生會記事

●三月本會例會

三月七日第一土曜日例により麹町區虎の門内なる東京女學館講堂に於て午後一時半より例會を開くドクトル久保田誠展君の齒科衛生談醫學士宮本俶君の膓窒扶斯に關する演説あり役員には幹事羽田三緒子副會長濱尾作子評議員松井子爵夫人同石川さだ子宮下咲子幹事高木かう子(出席順)等にて役員會員共に例月に比し少數なりき午後四時頃散會せり

小松宮彰仁親王殿下の薨去

元帥陸軍大將大勳位功二級彰仁親王殿下には豫て御腦病に罹らせられ橋場の御別邸に於て御療養中の處藥石も其効あらせられずして去月十八日午前三時御齡五十八を以て遂に薨去あらせられたり嗚呼悲哉親王は維新の際より兵馬の間親しく辛酸を嘗められ其御功績は申迄もなく加之日本赤十字社を初め各種の博愛事業を御統裁あらせられ上御一人の御信任いと深厚なりしが今や卒然として薨去あらせらる普天の下誰か慟哭せざるものあらんや本會員一同只嗚咽哀悼の至情に堪へざるなり

私立大日本婦人衛生會

●役員の參邸　彰仁親王殿下薨去の御發表あるや不取敢本會副會長濱尾夫人には一同を代表して參邸弔辭を述べられたり

●新潟支會報告

●二月例會　二月六日午後一時より例會を新潟市西堀通なる長善寺に於て開き左の兩氏講演ありしといふ

一麻疹の話　講師　工藤秀一郎
一物理學の應用　同　各務　芳一
附染物洗濯の注意

* * *

●茨城支會報告

●二月例會　去月廿二日水戸市常磐公園好文亭に於て開會し「理科學に就て」師範學校教諭草野金松「看護法」濟生病院長波多野惇「編もの」大沼こう諸氏の談話其他會務の報告等ありて午後三時閉會したるが當日出席者は會長河野夫人豊田副會長幹事評議員等七十餘名なりき尚會長より茨城婦人協會幷に茨城支會に向て金五圓の寄附ありしといふ

* * *

●山形支會報告

●二月例會　去月十四日第二土曜日山形女子師範學校に於て例會を開く來會者會員及學生無慮百餘名講師中原貞衛氏免疫に就て講話せられ午後四時散會せりといふ

* * *

●宇都宮支會報告

●二月例會　去月十五日午後一時より宇都宮市高等女學校内に於て例會を開き會員の出席五十餘名講師には神野、吉永、渡、三氏出席せられ神野氏には空氣流通に就き吉永氏には姙娠及分娩時につき渡氏には眼の解剖及生理に付きて講話あり終りに臨み神野氏には混製酒に付きて有害なる談話をなし種々注意を促され午後三時四十分閉會す

●右支會中島とみ子には支會創立以來幹事若くは評議員となり盡力淺からざりしが今回轉住せらるゝに際し支會は紀念として硯箱壹個に謝狀を添へ贈呈せりといふ

* * *

●高崎支會報告

横井特派員報

●二月例會　二月八日(第二日曜)高崎支會の例會を該市宮元町高等小學校内に開く此日曉來六花飄々いつ晴るべくも見へず一同午後の會合を苦想せしが午前十時頃より幸に吹雪は歇みぬれど陰雲密にして寒威甚しく名物のからッ風さへ吹荒む爲めにや來會者稍少數の傾なりしも豫て講話の實用的なると服裝の質素と時限の整確とを以て特色とする同支會の事とて時鐘の一時を報ずるや來會者の少數なるにも拘はらず直に開會し特別贊成員横井忠國氏は井口支會長に代りて登壇し先づ今般我總裁の宮殿下御改稱在らせられたる祝辭を述べ一同と共に萬歲を唱へて慶賀し奉り次て諸般の報告及び注意を爲す第二席陸軍二等軍醫倉林香三氏は「救急療法」と題し先づ救急法の必要なる所以を詳說し次て日常一般士女の心得置かざるべからざる創傷時の手當並に火傷凍傷の處置方法を懇話し綿紗卷軸帶三角巾等の使用法を實地に施して其要領を簡易にせしめられたるを以て一同大に其利益に喜びたり第三席耳鼻咽喉科專門關繇齡氏は「耳病に就て」と題し耳病の直達介達的徵候の諸種異樣なる事より話頭を開らき世人の腦病呼吸器病心臟病等と思惟せしもの丶耳病なりし實驗談より日常多き外耳、中耳病の原因の概畧を述べ延いて耳病の輕々に付すべからざる實例を擧げ平素之れが保護攝養の緊要なる所以を懇話せらる殊に聽覺錯誤に因る竊盜の失敗談、盲者との比較、幼兒の流淚の耳病に及ぼす關係等は大に會衆の耳を傾けて耳新らしく謹聽せし所なり

右の外「ペスト」の豫防豪所の衞生（衞生化學の應用）、婦人病の話等の講話ある豫定なりしも時間なきを以て果さざりしは遺憾なりき

此日前記の如き不良の天候なりしも井口支會長星野副會長を始め役員贊成員會員諸子は熱心にも一時前後より續々參會せられ寒さをよそに厚き交情

を温め正四時に閉會す

因記す高崎支會に於ては來る四月中旬櫻花爛熳の好期をトして總會を開き庶務及會計の報告並に役員の改選を爲す由に聞く

＊　＊　＊　＊

●高崎支會初會の節寄贈せられたる金員物品を受領順次に記載すれば左記の如し

一金弐圓　支會長大佐夫人　井ノ口　鐘子
一金壹圓　塚越　まさ子
一金壹圓　戸坂　梅子
一金壹圓　田中　千代子
一金壹圓　清水　かれ子
一金壹圓　林　喜曾子
一金八十錢　栗野　まる子
一金八十錢　齋藤　れう子
一趣向を凝したる題名と面白き説明を付けたる福引品　三箇　小島　きく子　阿部　むら子
一同上三箇　財津　いく子
一同上三箇　横井　忠圖君
一同上三箇　横井　忠道君
一同上三箇　莊司　駒子
一同上三箇　稻垣　彌々子
一同上六箇　鈴木　房子
一金五十錢　根門　てい子
一金壹圓　小島　そと子
一金壹圓　相川　藤賀子
一金壹圓參拾錢　土谷　ひやく子
一金五十錢　横井　昇子
一金五十錢　馬渡　なか子
一生花二瓶　長谷川榮助君
一同上三箇　大須　八重子
一同上九箇　菅井　勝藏君
一同上二十箇　本多　富貴子
一同上三箇　水戸部　きん子
一同上十二箇　水谷　證子
一同上十箇　岩佐　くに子
一同上五箇　林　讓君
一同上一箇　岩田　まさ子
一同上一箇　山梨　和歌子
一同上一箇　關根　とく子
一同上三箇　長谷川　りく子
一同上五箇　今井　むら子
一同上五箇　財津　又三郎君
一同上三箇　岸　げん子
一同同上二箇　菅井　きよ子
一同上一箇　早乙女　鋋子
一同上四箇　横堀　よし子
一同上二箇　武谷　せん子
一同上五箇　高草木又吉郎君

以上

●本會入會者

○本會幹事高木から子紹介

●淺草區左工門町一番地　特別會員　中山　幸子

○醫學士久保猪之吉君紹介

●廣島縣呉市和庄町　通常會員　天野　智惠子
●佐賀縣東松浦郡濱村相賀　通常會員　寒水　たみ子

○事務所へ申込

●山口縣立高等女學校寄宿舍　通常會員　德富　藤子
●日本橋區室町二ノ一　通常會員　平山　照子
●羽後國平鹿郡增田町　通常會員　石田　岩子
●群馬縣利根郡片品村大字土出村　贊成員　梅澤　藤吉
●千葉縣君津郡小櫃村　贊成員　根本　峯吉
●京都市富小路夷川上ル　通常會員　中江　あし子
●麹町區内幸町一ノ三、胃腸病院　通常會員　駒井　政子
●廣島縣賀茂郡川尻村加藤醫院内　通常會員　加藤　ます子

○赤坂蒲原和歌子紹介

●赤坂區一ツ木町五十九　通常會員　志村　むね子

○淺草百瀬きよ子紹介

●淺草區吉野町卅四、百瀬方　特別會員　増田　照子
●深川區東森下町五十八　通常會員　西部　りう子

○神田尾化よし子紹介
●神田區駿河台袋町濱田病院内　通常會員　横瀬　りう子
●仝　上　通常會員　白井　せん子

○本郷岩下ゆふ子紹介
●日下佐原郡大崎村上大崎三二一　特別會員　渡邊　妙子

○本郷山本のぶ子紹介
●本郷第一醫院　通常會員　大井田　なか子

○下谷根岸かな子紹介
●下谷區氷町二ノ四、根岸方　通常會員　坂田・明子

○岐阜加野存夫君紹介
●岐阜縣立病院内　通常會員　中島　むめ子

○信州森島俊君紹介
●長野縣下伊那郡飯田町　通常會員　秋田　ゑちゑ子

●高崎支會入會

○評議員横井昇子紹介
●群馬縣群馬郡佐野村字田中莊嚴寺内　通常會員　嚴　とみ子

○同栗野子紹介
●高崎市赤坂町官舎　通常會員　秀島　ゆき子

○高崎水谷蝶子紹介
●高崎市竜見町二十二番地　通常會員　馬場　のぶ子
●仝市新紺屋町十五番地　通常會員　保坂　なか子

○同本多美佐子紹介
●高崎市宮元町百二十一番地　通常會員　稻垣　喜美尾子

●山形支會入會

○岩本ひさ子紹介
●山形市　通常會員　堀口　きん子

○北島學士紹介
●山形市　特別會員　津田　みち子

○西野きぬ子紹介
●山形市　通常會員　榎森　ゑいゑ
●仝　阿波　とよ子
●仝　濱村　きう子

●新潟支會入會

○中隈とも子紹介
●新潟市南濱通　通常會員　川口　みち子

●茨城支會入會

○副會長豊田芙雄子紹介
●那珂郡日澤村　通常會員　小室　よし子

○矢板はな子紹介
●水戸市上市尋常小學校　通常會員　村松　ひさ子

●宇都宮支會入會

○水野しげ子紹介
●仝市川向町　通常會員　調所　越路子

○石田つね子紹介
●仝市寺町　通常會員　菊池　より子



●交換寄贈雜誌（最近之分）

日本婦人　麹町區元園町二ノ四　帝國婦人協會
日本赤十字　京橋區南傳馬町一　日本赤十字發行所

防開醫事	山口縣山口町	防長醫事社
統計集誌	京橋區瀧山町	東京統計協會事務所
おんな	麹町區下二番町三七	大日本女學會
體育	麹町郡飯田町三丁目	日本體育會
大日本私立衛生雜誌	京橋區宗十郎町七	大日本私立衛生會
農產特報	府下淀橋	農產商會
藥石新報	大阪東區今橋	藥石新報社
婦人新報	赤坂區榎木坂町	婦人新報社
愛國婦人	麹町下二番町	愛國婦人發行所
草藥新聞	大阪心齋橋	草藥新聞社
產婆學雜誌	日本橋區濱町三ノ七	日本產婆協會
婦人世界	大阪南區末吉橋通	浪華婦人會
佛教文藝	淺草新谷町十	佛教社
教育實驗界	本郷森川町一	育成會
東京教育雜誌	神田區一橋通廿一	東京教育雜誌發行所
藥學雜誌	牛込區新小川町二ノ八	日本藥學會事務所
廣島衛生醫事月報	廣島市猫屋町	廣島醫事月報社
婦女新聞	牛込區五軒町四一	婦女新聞社
越佐教育雜誌	新潟市寺裏通	越佐教育雜誌社
國家醫學會雜誌	本郷區元富士町一	國家醫學會事務所
大日本耳鼻咽喉科會報	本郷區丸山新町二十	大日本耳鼻咽喉科會
日本女學生	麹町三間町六九	日本女學生會
新潟縣衛生會雜誌	新潟縣廳內	新潟縣衛生會
中外藥報	神田區小川町一	中外藥報社
婦人と子とも	本郷區女子高等師範學校	レベルフ會
帝國大學一覽		京都帝國大學
工業雜誌	京橋區尾張町一ノ一	東京工業雜誌社
山陽新報	岡山市榮町	山陽新報社
豐國新聞	京都市下京區四條通	豐國新聞京都局
大阪醫學會雜誌	大阪東區淡路町一ノ三七	大阪醫學局

產科婦人科學雜誌	日本橋區濱三ノ七	產科婦人科學會事務所
婦人	神戸市三ノ宮町一ノ一七三	婦人協會
工手の母	大阪北區西野田新家四ノ町	工手の母新聞社
教育衛生雜誌	兵庫縣美嚢郡上淡河	私立教育衛生會本部
山梨衛生週報	甲府市代官町廿六	山梨衛生週報社
帝都新聞	京橋區築地南飯田川岸	帝都社
衛生報知	神戸市元町五ノ九十七	大日本私立衛生會神戸支會
衛生談話	麹町區飯田町四ノ三十一	通俗衛生茶話會
岡山孤兒院新報		岡山孤兒院
神經學雜誌	小石川駕籠町	日本神經學會
發明新報	京橋區木挽町十ノ八	發明協會
福田會月報	麻布區笄町百三	福田會育兒院
衛生事務講習所同窓會雜誌	京橋宗十郎町七	衛生事務講習所同窓會
躬行今月報	芝三田綱工	躬行會
女子學術講義	神田一ツ橋二十一	女子講學會
刺繡教科書	牛込矢來三	富田たか子
東北衛生新報	仙台鍜鉋町	東北衛生新報社

轉居

▲會員諸姉御轉居の際は可成新舊兩所御記入事務所宛御一報相願候

- ●山形縣西村山郡左澤町御免町へ　小林さの子
- ●琉球名護高等小學校へ　市來いく子
- ●麹町區中六番町二七、岩崎方へ　家坂みよの子
- ●相州横須賀中里二四三へ　上野延子
- ●岡山市東山下二番地へ　山川弥二君
- ●赤坂區青山南町六ノ一四七へ　島幸子
- ●甲府市代官町三十九番地へ　内藤喜千彌子

●日本區蠣殼町二ノ十五へ　增岡敎子
●群馬縣前橋市北曲輪町五十六へ　木下睦子
●大坂市東區平野町四ノ九十一へ　波多野てる子
●麹町區平河町六ノ二十二へ　關すが子
●麹町區一番町五番地へ　淸水富喜子
●橫須賀日の出町三ノ八十へ　磯部邦子
●長野縣南安曇郡有明村へ　三澤さわじ子
●本鄕區元町二ノ六十六へ　河村初子
●鳥取縣米子町茶町八十九へ　林まさ子
●小石川區小日向台町二ノ十六へ　橫山懿子
●麹町區富士見町四ノ十一へ　林竹子
●牛込區市谷山伏町十六へ　北代たけ子
●深川區中島町五、增田氏方へ　橫堀乙二子
●群馬縣前橋市北曲輪町へ　永田いよ子
●新潟縣古志郡長岡町大字長岡千手町三十三、三浦氏方へ　近藤ちい子
●新潟市本町通四番町二二二へ　高山新松君
●日本橋區蠣殼町一ノ四、戸崎氏方へ　田村しま子
●本鄕區弓町二ノ二十五、宇非方　武笠榮以子
●大阪市東區佐賀町五ノ四四、山下眼科院へ　楢崎一雄君
●神田區仲猿樂町十七東都看護婦會へ　小林すて子

●改姓名

●高崎文合　淸水梅子改　淸水駒子
●仝　水谷巡子改　水谷蝶子
●下關　守屋改　矢田やす子



大日本耳鼻咽喉科會總會報告

拜啓、四月總會の義は評議員會の決議によりて次の如く確定仕り候ふ間揃つて御出席下され度候。尚當日演説又は供覧等なさらんとせらるゝ方は本月十五日迄に本會事務所宛委細御通報下され度候ふ。追て演題その他の細目は本月下旬發行の會報にて御通知仕るべく候ふ。

(一)會日、四月三日午後ヨリ、會ノ報告役員改選及ビ演説
　　　　四月四日午後ヨリ、演説、參觀、懇親會等、

(二)會場、大學構内法科大學第二十七番二十八番教室、

(三)懇親會、四月四日午後六時ヨリ上野精養軒ニ於テ

　　會費　金貳圓五拾錢、

尚出演諸君ハ草稿御持參アリ度シ

三十六年三月　日　　東京、本郷、丸山新町、廿、久保方

大日本耳鼻咽喉科會事務所

山梨衛生週報

◎本紙定價一部金五錢（但し郵税共）
◎廣告料 五號活字十八字詰一行一回金貳拾錢◎何れも前金送附を要す
但し郵券代用（五厘切手に限る）は一割増を諾す

發行所 山梨縣甲府市代官町二六

山梨衛生週報社

◎山梨衛生週報は材料豐富趣味津々國民の寶典なり
◎山梨衛生週報は衛生に關する營業者の保護機關なり
◎山梨衛生週報は一つは施政を翼賛し一つは衛生の普及を目的とす
◎山梨衛生週報は救濟者の勁敵にして人道の維持者なり
◎山梨衛生週報は衛生を理論に止めず實行に務むるにあり
◎山梨衛生週報は其趣味を熱誠して此れを實行するに適[illegible]り

◎山梨衛生週報は健康の保護機關にして倶樂の源泉なり
◎山梨衛生週報は日本帝國に於ける衛生新聞の鼻祖なり
◎山梨衛生週報は知者と不知者とに甘苦相半する新聞紙なり
◎山梨衛生週報は各種の方面より解決する唯一の新聞紙なり
◎[illegible]なり
◎山梨衛生週報は五萬部を刷出し全國に配布す
◎山梨衛生週報は全國に[illegible]する處なし故に廣告の利益極めて大なり

私立大日本婦人衛生會茨城支會規則

●第一條　本會の趣旨及目的　凡人生の幸福を保持するには完全なる教育を望まざる可からず之を望まんとするには必ず衛生と相須ちて而る後ら始めて[illegible]を得るならん[illegible]東京[illegible]に於ける[illegible]に限りて延に茨城支會を開設し吾人が[illegible]行するを[illegible]の事項なして益研究し益改善を[illegible]その普及を[illegible]力めんとするに在るのみ[illegible]●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會の茨城支會として之を當水戸市に置く●第三條　本支會々員たるを得る婦人は何人にても入會するを得●第四條　入會手續は[illegible]八名族籍住所等を明記し本支會事務所に申込むものとす但し會費は東京本部へ直に[illegible]納むるものとす[illegible]通常[illegible]は[illegible]●第五條　會員は[illegible]類會員を分ちて特別會員通常會員[illegible]特別會員は一時に金五圓以上を[illegible]を納むるもの通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むるもの[illegible]●第六條　男子にして本支會の趣旨を賛成する者は之を賛成員とす其の數は本支會に於て[illegible]し[illegible]役員の協議に依り[illegible]會員に全じ[illegible]本支會に功勞ある者又は本支會に於て賛成員たることを望みたる[illegible]雜誌を[illegible]料にて受くることあるべし●第七條　本支會員[illegible]本部にて[illegible]する雜誌は[illegible]本支會事務所に報知すべし[illegible]●第八條　退會せんとする者は其旨本支會に[illegible]とし死亡等は[illegible]知人より通知せらるべし●第九條　本支會に左の役員を置く支會長一名、副支會長一名、幹事六名、評議員十二名[illegible]書記[illegible]庶務[illegible]幹事中より[illegible]名[illegible]任期は[illegible]年とし[illegible]總會に於て投票を以て之を定む●第十條　役員は[illegible]一條　本支會長は本會の總理し副支會長は支會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を[illegible]●第十二條　本支會は例會を[illegible]又[illegible]外の[illegible]もの[illegible]臨時[illegible]會ある[illegible]●第十三條[illegible]は[illegible]ある[illegible]●第十三條[illegible]又は之に[illegible]知人家族[illegible]會[illegible]會員[illegible]時[illegible]●第十四條[illegible]講話[illegible]會員の[illegible]本支會の[illegible]十五條[illegible]會の所有金は本支會々費の收入金は其の[illegible]●第十六條[illegible]●第十七條[illegible]●第十八條[illegible]

收支決算及成績[illegible]な報告するものとす●第十九條　會員中[illegible]本會の[illegible]障害となるべき所行ある者又は會費を滯納するものある時は本會支會長は評議會の決議を經て除名する事あるべし●第二十條　本部の通知により[illegible]數條の外其の必要を認むべき事項あらば本規則を適用するものとす●第二十一條　本支會規則は本支會長の意見又は會員二十名以上の賛成により總會の意見を經るに非ざれば之を變換することを得ず

明治三十四年十月創立

水戸市上市田見小路二十五番地

茨城支會

私立大日本婦人衛生會高崎支會規則（明治三十五年四月創立）

●第一條　高崎支會は大日本婦人衛生會に屬し汎く婦人をして人生の健康を保持する方法を研究し衛生上の智識を開發せしめ國家社會の[illegible]を増進するを目的とす●第二條　高崎支會は高崎市五十[illegible]番地に設く●第三條　本支會は大日本婦人衛生會と稱し事務所を高崎[illegible]の本會々員と支會限りの支會員とを以て組織す●[illegible]本會支會員たらんと欲する者は住所姓名を[illegible]の種類を詳記し[illegible]三[illegible]月分以上の會費を添へ申込むべし●第五條[illegible]其の[illegible]會員にして贊助員となす●第六條　會員に[illegible]して[illegible]死亡又は[illegible]退會する者は其旨を本支會事務所に通知せらるべし●第七條　支會に左の役員を置く支會長一名副會長一名幹事六名評議員十二名●第八條　役員は總會に於て公選し又は會長之を指名す但役員の任期を一箇年とす[illegible]●第九條[illegible]一回[illegible]評議會を開き[illegible]●第十條[illegible]●第十一條[illegible]總會[illegible]●第十二條[illegible]●第十三條[illegible]月分[illegible]前納すべし[illegible]●第十四條[illegible]●第十五條　本支會の所有[illegible]●第十六條[illegible]●第十七條[illegible]●第十八條[illegible]

高崎市[illegible]番地

私立大日本婦人衞生會

新潟支會規則

●第一條 本會は大日本婦人衞生會に屬し婦人衞生の研究を目的と[illegible]し傍ら一般慈善事業を爲すにあり●第二條 當支會の會員は左の六種とす[illegible]終身會員[illegible]時限り[illegible]金[illegible]拾圓 特別會員毎月金參拾錢 通常會員[illegible]とするものは役員に申出で其承認を得べし●第四條 會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衞生雜誌を配布す●第五條 會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衞生慈善資金とす●第六條 支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す各役員の任期は一ケ年とし再撰するを得役員は總て無給とす●第七條 支會は毎月六日通常會を開き衞生及び慈善に關する談話をなすべし●第八條 毎年一月總會を開き支會の要務を執行す●第九條 本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善賑賣[illegible]慈善演藝會等を開くことあるべし●第十條 天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄贈を募ることあるべし會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は賛成員となすべし●第十一條 一般慈善事業の贊助天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす●第十二條 支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし●第十三條 特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衞生會の規則を準用す

事務所新潟市[illegible] 和田くに子方

明治廿九年四月創立　新潟支會

私立大日本婦人衞生會

山形支會規則

第一條 本支會は私立大日本婦人衞生會會員山形市在住者を以て組織す●第二條 本支會に會長副會長の外幹事四名評議員若干名を置く會長副會長は公撰し幹事評議員は會長之を撰任す役員の任期は一ケ年とす●第三條 本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰擧庶務會計の報告をなす●第四條 入會せんと欲するものは[illegible]會費を添へ會員に紹介を依賴すべし本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし●第五條 本會々費は會計幹事に納むべし但し六ヶ月又は一ケ年分新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし●第六條 服裝は[illegible]質素なるを要す[illegible]及羽織は紺布を用ゐるを妨げず

明治三十三年二月四日創立

事務所山形市旅籠町新築四通二百八十九 北島氏方

山形支會

私立大日本婦人衞生會

宇都宮支會規則

第壹條 本支會ハ私立大日本婦人衞生會宇都宮支會ト稱ス●第貳條 本支會ニ會長一名副會長一名評議員拾五名幹事四名ヲ置ク會長副會長ハ公撰シ評議員幹事ハ會長之ヲ撰任ス各役員ノ任期ハ一ケ年トス●第參條 毎月壹回(第一日曜日)講話會ヲ開キ毎年五月講話ノ外役員ノ改撰庶務會計ノ報告ヲナス●第四條 入會ハ宿所姓名ニ第五條ノ通リ會費ヲ添ヘ事務所ヘ申込ミ又ハ會員ニ紹介ヲ依賴スベシ本支會ヲ退會セントスル時ハ其旨事務所ニ屆出ツベシ●第五條 本會々費ノ外別ニ支會々費ヲ要セズ會費ハ一時ニ六ケ月又ハ十二ヶ月分新ニ入會ノモノハ其月ヨリ六月又ハ十二月迄ノ分ヲ納ムベシ●第六條 本支會ノ助ニ支會々員ヲ置キ支會々費トシテ一ケ月金五錢ヲ納ムルモノトス●第七條 講話會ニ出席[illegible]第八條[illegible]●第九條[illegible]支會規則ニ揭ケザル[illegible]本會ノ規則ヲ準用ス

明治三十四年二月三日創立　事務所宇都宮市馬場町[illegible]　宇都宮支會

▲本金庫は社會が忠勇なる戰死の軍人を崇敬するが如く傳染病の豫防救治に從事して遂に其職務に斃れたる官吏、公吏、及看護夫、看護婦に救濟金を贈貽し以て國家が扶助吊慰の及ばざる所を助け社會が慈善事業の之なき缺間を補はんか爲め設立せり

▲本金庫は廣く右の趣旨に適ひたる志士に救濟金を贈貽す而して其贈貽金は大方の義金を集めたる利殖金より支出するものなれば世の慈善家諸氏は金員の多少を問はず奮て寄附あらんことを望む

明治三十五年十二月廿三日設立認可

財團法人

傳染病救濟金庫

東京市京橋區宗十郎町七番地
大日本私立衛生會内
電話新橋(二四七)番

▲本金庫は今回「ペスト」病毒に斃れたる故本所病院醫員醫學士横田利三郎氏の遺族に金參百圓を贈貽せり

▲本金庫の前身は明治三十二年大阪市に於て「ペスト」流行の際病毒に斃れたる故檢疫官馬場碩一、醫師山中篤衛、若林啓三氏の遺族に各々三百圓を贈貽せり

▲本金庫は御申込次第規則書類を差出し東京府下は寄贈金受取人を派出す、

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衛生會徽章規程

第一條　大日本婦人衛生會々員は其會員たることを表章するため左の徽章を用ゆ

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する塲合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は左の實價を以て會員に頒つ





●通常會員章

第三號　メッキ製拾五錢、送費六錢

第二號　正銀製五拾錢、送費六錢

●終身及特別會員章

第一號　壹圓、送費九錢

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるべし會員章は上段記載の實價にて御頒ち申候へども送費とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候也但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料を御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京牛込郵便局）宛振出あるべし又た價格表記通運便、何にても差支なし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數に應じ本會雜誌進呈の事

廣告料	一頁五圓半頁其二分一以下同之　●特別廣告一頁拾圓半頁其二分一以下同之
本誌一部定價貳拾錢	

東京市牛込區矢來町三番地中丸、四・

發行所　私立大日本婦人衛生會

東京牛込區矢來町三番地

編輯兼發行人　田中徳三郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷人　渡邊智

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工塲印刷

明治廿六年三月二十日印刷及發行（毎月一回十五日發行）

婦人衛生雜誌第[illegible]六拾號